日本梵語辭書史概說

——心覺より江戸期まで——

岡田希雄

自分は、前に同じ名の文で、支那撰述のもの、本邦撰述のものゝ中、奈良朝期より平安朝末の心覺以前までのものを述べた事がある（立命館文學昭和十年八月號）。この文は其の續篇で、大體の原稿は早く出來て居たが都合ありて發表が延びて居たものである。今度印刷するに際して、清書をした部分もあるが、調査は大體其の時のまゝである。此の種の辭書は傳本少なきため殆んど實物を見て居ず、

日本梵學史概觀　高楠順次郎博士（大正十一年刊行の日本佛教全書の悉曇具書に入る、簡單、江戸期の辭書を說くところは二十三字詰十五行ほどのもの。）

悉曇撰書目錄（右の概觀の一部で、第四門の梵語辭書類に支那や日本のを載す、本邦のは二頁程、江戸期のは一頁、概觀に見えたもので、こゝには記さぬものもある。）

慈雲尊者鑽仰會講演集　第二輯所收　高楠博士講演筆記

靈雲叢書解題　行武善胤氏（大正五年十月刊）

佛書解說大辭典

立命館大学法文学部
文学科創設記念論文集（昭和１６）

密教大辭典

等を見て備忘的にまとめたのである。其のつもりで見て頂き、教示を垂れられたくお願ひする。

一

多羅要鈔三卷　常喜院心覺

日本人の手に成つた梵語辭書は、奈良朝末頃に出來て居たかも知れないと思はるゝものも、平安朝期のものも、大概佚亡してしまつて居るやうだが、（註）たゞ一つ完全に現存し、大正新脩大藏經第八十四卷悉曇部に收載せられて、昭和六年十二月に刊行せられたものがある。其れは平安朝末に出來たものにして、高野山の常喜院心覺の多羅要鈔三卷である。（註、唯一つ、高野山金剛三昧院に梵語集一帖が存すると云ふ）

心覺は平安朝末期の梵學者として有名である。今密教大辭典を引用して其の略傳を示さう。

シンカク　心覺　一七七七～一八四〇

常喜院流祖。字は佛種房、一に宰相阿闍梨、又は常喜院阿闍梨と號し、參議平實親の子なり。初め三井園城寺に入りて剃髮受戒し、常喜院に在りて十乘觀法を習ふ。嘗て勅を拜し、宮中に於て興福寺珍海と宗義を論じ、偶々心覺の答辭屈す。此に於て顯を捨てゝ密に入り、醍醐山賢覺・實運の二師に從つて小野法流を受く。又和州光明山に入り、覺聖に隨つて受學し、苦修砥礪、山を出でざること二十五年なり。後高野山に登り、保元元年四月十九日成蓮院に於て、兼意に就きて三部の玄奥を究め、兩部灌頂を受け、又應保二年六月十七日金剛峰寺に於て覺

印に重受す。常に密軌を精尋して多くの疏鈔を著し、僧官を厭ひ菩提を求め、高野山に一院（元の名に從ひて常喜院と稱す）を剏めて之に居り、三時の誦經、朝昏の禮讃怠らず、後に堪増の讓を受けて兼意の遺跡往生院（今の遍照光院）に住す。治承四年六月二十四日同院に寂す。（一說養和二年六月二十四日）壽六十四。師は台密・東密・野澤の諸流を兼傳し、自ら一家風を樹て、其流を常喜院流又は往生院流と稱す。

密教大辭典は、心覺の肖像を載せ、著作も夥しく書名を擧げて居るが、悉曇關係や音義物としては

眞言集　五卷　　貝葉集　五卷
梵語集　二卷　　法華音義　十卷
悉曇十問答　一卷　　悉曇字記勘文　五卷
多羅要鈔　三卷

の如きがある。

さて多羅要鈔三卷（本文としては、醍醐寺の古寫本があり、其の醍醐寺本を底本として、井上哲次郎博士所藏寫本寛政三年二月の寫本であるらしい）で校合した大正新脩大藏經本もあるが、今は京大國語國文學研究室の寫本三冊によりて說明し、適宜大藏經本を參照し、又龍谷大學本（京大本と字配り紙數等一致す特色無し、奥書も無し）をも參照する。因みに、本書を、西村兼文の續群書一覽（八二頁）が小川僧正承澄の撰として居るのは誤りである）は既存の梵漢對譯辭書を材料として、漢字音譯の梵語、若しくは梵字書きの梵語と其の漢字義譯とを對照せしめ（梵字書きの添うて居るのは、資料と成つた辭書に既でに梵字書の添うて居るものに限られて居るから、義淨千字文、註利言梵語雜名、全眞の書に限られて居る、尤も他にも少しは存する）

梵語の頭音によりて色葉分けしたものにて、其の色葉の部門の標出眞假字は、音假字が主であるが訓假字も交り居りて（註、利言は、これが正しいのだが、古くより禮言と誤られ、多羅要鈔も誤つて居るから、今後は禮言と書く）

伊　呂　波（刊本目次八本文波）　仁　保
邊（刊本目次へ本文邊）　登　知（刊本目次千本文知）　利　怒（刊本目次奴本文怒）
留（刊本目次流本文留）　遠　和　加（刊本本文迦）　與
多（刊本目次太本文多）　禮　所　津（目次豆）　禰
那（刊本目次奈本文那）　郎（目次良）　無（刊本目次本文共武）　宇　爲（刊本目次本文共井）
能（刊本目次本文共乃）　於　久　也（刊本目次本文共夜）　万
介（刊本目次芥本文計）　不　已　葉（刊本目次本文共江）　天
阿　左　幾　由　女
躬　志　惠（刊本目次衞本文惠）　比　毛
世　須

の四十七字であり、本文中の標出では各々の上に梵字が存する（龍大本には梵字は無い。醍醐寺にも無いらしい。龍大本には此の他にも、本文中に存すべき梵字が全部缺けて居る、梵字を知らぬものが寫したものと見える）ツ・ラの二部は目次に書いてある眞假字と本文中のものとが一致せない。怒・與・能・惠の四部には其の部に收められて居る梵語は無く（怒與能三部は、收めらるる可き梵語が無いからである、惠部の語は葉の所に收められて居る。）遠部はたゞ一語あるのみで、他の遠部所屬の語は皆於部に收められて居る。エに葉を書いて居るのは珍しいがエフの下略であらう、醍醐寺本の江ならば

普通である。ミに躬を書いて居るのも珍しい。さて是れらの眞假字の上に書いてある梵字を檢すると、(問題に成らぬものはこゝに擧げない)

ラ行はロリルには遍口聲の第二番目のものrを書き、レラには第三番目のものを書いて居る。

ハ行はハホヘはba字の如くに見えるが、これはpaが一寸した筆致でbaと紛れたのであらう。

サ行はソサセスは遍口聲第七字saであるが、シだけは五類聲のcaを使つて居る。

ワ行のワヰヱは遍口聲第四のvaを使用して居るが、ヲは摩多のoを書き、オには遍口聲のvoを書いて居る。心覺の頃は五十音圖に於けるオヲの音價に區別が無かつたのであるから斯う云ふ誤りも生じたのだらうが、それにしても、悉曇學者としての心覺がoとvoとを誤つたと云ふのは、當時遍口聲のvaを悉曇家は何と發音して居たかと云ふ事が問題と成つてくるので興味がある。

ケフコエテのエは摩多のeを書いて支障無い筈であるのに、遍口聲のyeを書いて居る。當時のエはyeであつたとする說の一證と成るのであらう。

斯くの如く梵字に不審があるが、これらの梵字は、醍醐寺本には見えないために、心覺の本には元來記入して無く、後人が加筆したのでは無いかと云ふ疑ひも生じる(井上博士本にはやはり記入してある)。

さて本書では以上の如くに色葉分けして居るのではあるが、國語の聲音と性質の異る梵語(梵字書きのもの、漢字音譯のもの)を色葉分類する事は完全に行く道理も無いから、從つて、梵語の分類は、タの所にta tha da dha ṭa ṭha (ḍa ḍha は收められて無いが、若し是れらを語頭音とする語を收めると成ると、當然こゝへ收めたであらう。星宿の意味の

諸察怛羅（ダキニタ）が收められて居るが、此の語は梵字では nakṣatra と書かれ、解說梵語學によりても明らかである如くに、na部に收む可きものである、それがタ部に收められて居るのである）らが收められ、カ・サ・ハ・ラ行も同じ趣きでタ部にもyoが收められると云ふ具合にて、極めて便宜的なものである、斯う云ふ事は、後の假名分類梵語辭書（但し自分の見る事出來たものについて云ふ）に共通の事であつて（但し流石に行智の根橘鈔は然らで無い）今日でも梵語に限らず、外國語を假字分類しようとする場合には、發音の性質が異るので、何うしても斯う云ふ風に便宜的に成らざるを得ないのは云ふまでも無いから、心覺の態度は先づ非難するには當らないのである。

上卷は　伊より加まで八十紙（醍醐寺本は和まで）

中卷は　與（但し語彙は無し）より天まで九十九紙（醍醐寺本萬まで）

下卷は　阿より須まで九十八紙

一頁は主として七行二段書きであり、中には一段書きのところもあり、又空白の多い頁もあるとは云へ（千字文、梵語雜名、全眞の書は皆三段書き）大體の分量の見當がつく筈である。四六倍版の大正藏經では七十四頁分ある。

さて心覺が本書を書いたのは、自ら一々の語を其れ〴〵の經律論より引いて、其れに自ら譯語を加へたと云ふやうな面倒な著述方法を採つたのでは無くて、既存の辭書類を手許に於いて、其れらより必要なものをイロハ順に拔き出し、其の配列を色葉式に改めたに過ぎないのであつた。極めて樂な編輯方法を採用したのであつた。そして其れら既存の辭書は左の如きものである。

十卷翻梵語集　　信行三卷梵語集

義淨千字文　　禮言梵語雜名

全眞の著（これは何種あるか判らぬし、書名も一定せぬから斯う書いて置くのである）

是れらは必ず此の順序で引用せられ（マ部で全眞の書と梵語雜名とが先後して居るのは特殊の除外例である）「已上出翻梵語集」「已上出信行梵語集」「已上出義淨千字文」と云ふ風に引かれて居る。但し、此の順序の事は、醍醐寺本では、一定せないものらしく、特に、千字文・梵語雜名・全眞の書らが京大本のやうに、其の部の尾の方に書かれず、翻梵語集や信行の書の方が尾に存すると云ふ大きな相異點がある。重要な參考書であるところの翻梵語集の如きは、其の部の首に存するのが妥當であるやうに思はれる點から云へば、醍醐寺本の方が草本的のものであつたのでは無いかとも考へられる。但しどこまでも主觀である。

とにかく、分量に於いて最も多く引かれて居り、多羅要鈔の根幹と成つて居ると認められるものは、十卷翻梵語集であり、次ぎは信行のものである。翻梵語集の引き方を檢するに、原本の意義分類の順序で引き――但し一部門中の語の順序は必ずしも原本のまゝでは無い、が、さりとて、然う配列せなければならぬと云ふ標準があるとも見えぬ。何故斯う云ふ風にわざと順序を變へたかは判らぬ。原本の順序のまゝに拔いて行くと云ふ方法は、最も樂な方法であつた筈である――譯註は隨意に簡單化して居る（中には心覺が便宜に加へたものもあるやうだ。又信行の說と比較して「信行同」「信行同之」「信行云」「信行記同」「信記同之」（信記は信行記の略か、若しくは信行の誤寫か）などゝ註したものもある（例へば伊部波部の如きが其れである）。此の類のものを、自分は單純に心覺の註文であらうと考へて居たが、醍醐寺本を見ると、斯う云ふ註記は見えないから、註記の筆者は判らなくなつてしまつた。しかし、他の本に見えないからと云つて、心覺の記入では無いと決めてしまふ事も理由が無いと思ふ。）是れから推すと、信行梵語集を引用する態度も、亦、先づ〳〵此の通りであつたらうと考へられる。

さて本書は、右の如く、翻梵語集、信行梵語集、義淨千字文、禮言梵語雜名、全眞の著、以上の五種乃至六種類を必ず引いて居るが、其れらを引いた後にも、時に數語を擧げて書名を記して居るものもある。

しかし、其れらは、京大本と刊本とで出入もある。心覺自ら記入したものもあれば、後人の補記も交へて居るのだらう。本書としては主要な部分であるとは云へない。京大本の阿部の尾には室町期の悉曇學者として名高い印融（塵袋永正五年寫本の書寫者としても忘れられない人）の補記したものも見える。

さて多羅要鈔所引の主要書につき少し述べよう。

先づ多羅要鈔が、量に於いて最も多く引用して居り、多羅要鈔の根幹であるかの如くに見られるのは、意義分類體辭書である十卷の翻梵語であるが、普通は翻梵語集として引かれ稀れに翻梵語とある。醍醐寺本では卷數を擧げてないが、京大本や井上博士本では、最初の伊部では「十卷翻梵語集」として引かれて居るので、此の書は卷數と書名とに於いて、眞諦のものと謂はるゝ翻梵語十卷と酷似する故に、直ぐ兩者の關係が問題に成る筈であるが、やはり兩者は同一の書である。卽ち多羅要鈔の意義分類と翻梵語の其れとは、部門名のみを取りて比較した場合に

法名を　經法部・經部ニの　佛經部ホヒ　法經部セなど

寶名を（寶部と云ふが普通なれど）　寶財部ヒの所　寶珠部マの所

刹利名を　王部・王太子部

寺舍名を　寺部・寺精舍部・精舍部

國土名を　國部イな國部ど　國界部ナの所

菩薩住地名を　菩薩地・菩薩位部（アなど）

鬼名を　鬼神部（トの所）

雜狩名を　獸部（カの七一左）

女人名を　女部

菓名を　菓子部（チなど）

菩薩觀行名を　菩薩行部・菩薩德行部

衣服名を　衣部

と書いて居ると云ふ風に相異するものもあるとは云へ、甚だしく似て居るのは事實であり（部名の比較は專ら京大本で試みたから、醍醐寺本と比較すると、自ら相異も生じるであらう。尤も斯う云ふ事實は、京大本を材料とした以上、今更斷らなくても明らかな事である。以下の文に於いても此の點を諒知せられたい。）更らに精しく比較し、假りに任意に「波部」を取りて眞諦本と比べると、部名では（「雜人部」まで示す、括弧の中は眞諦本の部名と順序とである。點をつけたのは相異のあるものである）

佛名部（佛名第二）	佛德部（佛功德名第三）
經法部（法名第四）	外道法（外道法名第五）
雜法部（雜法名第六）	菩薩部（菩薩名第七）
菩薩地（菩薩住地名第八）	菩薩功德（菩薩觀行名第九）
比丘部（比丘名第十一）	比丘尼部（比丘尼名第十二）
沙彌部（沙彌名第十三）	聲聞德行部（聲聞德行名第十五）

雜　觀　行（雜觀行名第十六）　罪　障（罪障名第十七）
功・德・衣・部（加絺那衣法第十八）　婆　羅　門　部（婆羅門名第十九）
王・太・子・部（刹利名第二十）　優　婆　夷（優婆夷名第二十二）
仙　人　部（仙人名第二十三）　外　道　部（外道名第二十四）
長　者　部（長者名第二十六）　夫　人　部（夫人名第二十八）
女　人　部（女人名第二十九）　雜　人　部（雜人名第三十）

と云ふ小異はあるが、（此の相異、部字の有無も皆龍大本と一致す）部門の數（「火名」第五十八の如くに一語しか收めないものは多羅要鈔ももらして居る）配列は全く一致する。各部門内に於ける各語（中には「佛德部」にあるとして擧げて居るのに翻梵語集では次ぎの「法名」中に存する頗浮達摩の如きもある）の註文（六六丁右カの比丘部の迦樓陀夷の註文は、比丘名第十一の註に比し遙かに多いので疑問が起るが、これは迦絺那衣法の條に見える迦留陀夷比丘の註文をも加へて擧げて居るのである。だから、たま〳〵註文に多寡の相異があるからと云つて、心覺所引のものと現行十卷翻梵語集との關係の否定は、輕率には出來ないのである）も大體一致する。多羅要鈔に見える語は、順序こそは異るものもあるが、ほんの少數のものを除けば皆、眞諦本に存するのである（その少數の例を云ふと、經法部の波梨波羅・婆跋富羅共に八才が「法名」中に見當らず、「雜法部」に存する拔提名阿毘鉢施・波摩波羅が「雜法名」に見えず、「菩薩部」の薄呿梨波羅が「菩薩名」に見えず、「比丘部」の般那・跋修羅、「比丘尼部」の波摩阿頭摩・波頭、「王太子部」の婆羅婆王等が其れ〴〵「比丘名」・「比丘尼名」・「刹利名」に見えないものゝ如きが其れであるが、其れらの中には部名が取り違へられたとか、心覺が鉢頭迦三昧雜觀行部陂三奢婆羅門部と書いて居るものが、翻梵語集では鎭頭迦三昧・三陂奢に作られて居るとか云ふやうな事で、探し出せないものもあらう。故に此の類の小數例があつても重視するには當らないと思ふ）。

斯う云ふ關係を見、又他に於いても、任意のところを比較しても、やはり殆んど一致するのを見れば、多羅要鈔所引本が眞諦本と同じである事は認めて可いと思ふ。

次ぎに信行梵語集、義淨千字文はすでに述べたし、梵語雜名は調査の必要もあるまいと思ふので、全眞の書を考察すると、全眞の著述は、心覺の多羅要鈔に大いに引かれて居るが、其れを引くのに、心覺は何故か數種の名前を使用して居る。今、色葉の各部の其れ〴〵に於いて、如何なる名で引かれて居るかを示すと左の如くである。漢語譯を先きに擧げ梵字書きを後にしたものと、其の反對のものとがあるから、漢語譯を先きに引くものは片假名で示し、其の逆のものは平假名で示す事とする。

全眞梵語集　イロハニホヘトチリカタまて

全眞唐梵文字　ホト

全眞梵唐語　りそやけあさひ

全眞梵唐　ふ

全眞唐梵語　し

全眞譯　レこきゆみせす

全眞記　ならうくえ

心覺は他の書を引くには、翻梵語集を極めてまれに少し異つた名で擧げて居る他は、同一の書を異つた名で引いて居ると覺しき事が無いので、全眞のものに限り、此の通りであるのを見ると、是れら七種の書方と成つて居る書が、

同一の書であるのか、其れとも二種または其れ以上の書であるのか、と云ふ事が疑問と成る。ところで、容易に氣づく事であるが、ホトの兩部では、梵語集と唐梵文字とが列記せられて居るから、此の二つは別書であるために別種の名で記されて居ると見なければならぬ。又リ部では梵語集と梵唐語とが同時に記されて居るから、兩書も亦別書であると見てよいやうだ。だが其の他のものに成ると、全く書名の相異が本の內容其のものゝ相異と如何なる關係にあるかは絶對に推定が出來ないのであり、たゞ、カ以後の諸部所見の書名が、決して重複する事が無いので、カ部以後では、名前は變つて居ても、其は同一の書を別種の名で引いて居るに過ぎないと云つても支障が無いと云ひ得るのである。ところが全眞には、唐梵文字と云ふのがありて、現存して居るから、其れと心覺所引のものとの關係を檢して見ると、ホト兩部所見の「唐梵文字」は、其の十二語が、中にはやゝ異るものもありとは云へ、全部現行唐梵文字と一致するから、現行本と同じ物と見て可い。次ぎに「梵唐語」と成ると、一例をケ部に取りても判る通り、現行唐梵文字とは異るものである。「梵唐」「唐梵語」も亦同じである。「全眞譯」をミ部で檢しても、「全眞記」をナ部で檢しても、やはり現行唐梵文字とは異る。して見ると全眞の書は、

（一）　現行全眞唐梵文字と一致する唐梵文字

（二）　現行の全眞唐梵文字と一致せない梵語集

（三）　現行の全眞唐梵文字と一致せない梵唐語・梵唐・唐梵語・全眞譯・全眞記

の三種に別れるやうだが、是れ以上は判らぬ。

以上は京大所藏寫本によりて得た推定說であるが、唯一の古鈔本たる醍醐寺本と比較すると、引用書名に於いて相

異があり、從つて結論も大分に相異して來る。今醍醐寺本を飜刻した大正新脩大藏經本によりて、全眞關係の書名を擧げると其の書名は

1、全眞唐梵文字　イろハニホトカタま
2、全眞千字文　ろハニホヘトチリカタま
3、全眞記　えならうく
4、全眞譯　こきゆみ
5、全眞梵唐語　そけてあさしひ
6、全眞梵唐ふ
7、唐梵文字　リソ

と云ふ風に成つて居る。此の中、(7)の唐梵文字だけは全眞云々とは無いのだが、大藏經本の校異によると、井上哲次郎博士所藏本（これは京大本と同じ系統のものと信ぜられる）には、リの所では「全眞梵語唐語」と成つて居り、京大本では、リ・ソの兩方ともに「全眞梵唐語」と成つて居るから、井上本も京大本も全眞の書なる事を確認して擧げたのである事は明らかである。さて斯くの如く七種の名で引いては居るものゝ其の七種間の關係は、如何と云ふと、全眞唐梵文字と全眞千字文とは、屢々並記せられて居るから必ず別種のものである事が考へられるに過ぎない。ところで、京大の寫本と大正新脩藏經本（今是れを刊本と呼ぶ）との間では、全眞唐梵文字・全眞梵唐語・全眞梵唐・全眞譯・全眞記の五種の名が一致し、全眞千字文・全眞梵語集・全眞唐梵語・唐梵文字の四名が一致せないが、書名の一致するものは、引用せられ

て居る本文内容も大體一致する（たゞ全眞唐梵文字だけは、寫本はホトの二度しか引かぬのに、刊本は九度引いて居ると云ふ大きな相異がある）だから其れらについては、寫本引用のものに就いて云うた事が、當てはまる譯である。そこで書名の異るものにつき考察すると、寫本の全眞梵語集は刊本の全眞千字文と同じものであつた。故に現行の全眞唐梵文字とは異るのである。次ぎに寫本の全眞唐梵語は刊本の全眞梵唐語と同じものであつた。又刊本に單に唐梵文字とあるものは、リ部のものゝ比較のみによりて、寫本所引の全眞梵唐語と同じものである事が考へられる。又刊本所引全眞梵唐語と寫本所引全眞梵語集とが、同一のものである事もテ部の比較で判明した。斯くて、寫本所引のもののみに就いて考へた事、刊本のみに就いて考へ得た事、兩者を比較して考へ得た事を綜合すると

（一）全眞千字文・全眞梵語集・全眞梵唐語・全眞唐梵語・唐梵文字は皆同じものゝ事であり、現行の全眞唐梵文字とは合はぬ。全眞梵唐も亦現行の全眞唐梵文字と合はない事や、名稱の類似を見ると、やはり全眞千字文と同じものかと考へられる。

（二）全眞唐梵文字は、現行の全眞唐梵文字である。

（三）全眞譯・全眞記とあるものは、現行の全眞唐梵文字とは別本であるから、全眞千字文と同じものかも知れない。しかし、全眞譯とか全眞記とか云ふ書方を重視すると、全眞千字文とも異るかも知れぬ。確かな事は判らぬ。たゞ全眞譯にしても、全眞記にしても全眞千字文と重複してないのだから、全眞千字文と同じものと認めても理論上は支障が無い。

と云ふ事は出來さうである。とにかく心覺所引のものから、全眞には現行の千字文組織の唐梵文字以外に別に、今一

種干字文が存した事が認められるのである。但し、更らにも一種計三種が存したか何うかと云ふ事に成ると判らない。其れにしても、心覺が、斯う云ふ亂雜な引き方をしたと云ふのは、若し孫引で無かつたとすれば、心覺を責むるに足る事である。

さて本書を多羅要鈔と云ふのは、梵語は多羅 Tala 樹の葉に書くからであり、梵語の肝要なるものを錄したものゝ義であらう。密教大辭典は多羅要鈔の名で擧げて居り、京大本、龍谷大學本、大谷大學本も同名であるから、自分も專ら多羅要鈔と書いて來たが、多羅葉と云ふ語もあるから、佛教大辭彙や、慈雲自記の梵學津梁目錄の第二、第四は多羅葉鈔の名であげ、醍醐寺の國寶三帖本（寫眞は密教大辭典に見ゆ、建保三年及び文曆二年五月の奥書がある隆譽書寫本である）は多羅葉記と云ふ名と成つて居る。何れか一つが本名であつたのか、二つともに本名であつたのかは判りかねる。因みに密教大辭典が「多羅葉記・梵名字彙といふ」と云つて居るのを見ると、此の書方では古くから梵名字彙と呼ばれて居たかの如くに解せられるが、恐らくは梵名字彙の名は、德川時代に成つてからの俗稱であらう。蓋し辭書を「字彙」と云ふ風に成つたのは、明の梅膺祚の字彙（萬曆四十三年正月他序、卽ちわが元和元年）が流布して以來の事であるからである。密教大辭典が梵名字彙と云ふやうな俗稱を、何の斷書きもせずに擧げた事は、決して妥當であるとは云へない。又本書が色葉分である事に關して「本書は本邦に於ける伊呂波字典の嚆矢ならむ」と云つて居るのも何うか（此の事は、悉曇撰書目錄にも「或は我國伊侶波分字書の嚆矢たるべきか」と疑うて居る）。心覺が本書を作つた時期は、序跋等が無いので全く不明であるが、其の密教を修行して居た時代の事とするならばとにかく、もし保元以後の著述であるとすると（心覺は保元より十年程後の仁安三年四月中旬に、慈覺大師眞筆と云ふ唐梵文字を寫して居る、其の轉寫本が東寺金剛藏に存する）、多羅要鈔以前に色葉字類抄の前身たる色葉和名（世俗字類抄二卷本と同じもの

であるらしい）が既でに天養頃には存在して居り、更らに溯れば法三宮の梵漢相對鈔も存したらしいからである。とにかく多羅要鈔を以て色葉辭書の嚆矢と見るは、危險であらうと思ふ。がともあれ、本書が色葉分類であるのは重視すべきである（恐らくは梵漢相對鈔の組織の模倣であらう、後述する）。

寫本としては

明應九年十一月上旬之候書寫之了　印融（上卷）

願以書寫功德力　悉地證明三寶境

非母幽靈成正覺　法界衆生同利益

明應九年庚申十二月十三日書寫了　印融（中卷）

願以功德　非母幽魂　出離生死　頓證菩提

と云ふ奥書ある印融本（印融時に六十六歲。下卷に奥書無きは寫し落しか。此の奥書の全く無い本もある）の系統本が傳はつて居るが、印融の眞筆本が傳存して居るか何うかは知らぬ。醍醐寺の國寶枡形三帖本の奥書は左の如くである（高楠博士の記事や、大正新脩大藏經や第二十一回大藏會展觀目錄による、一致せない文字がある）

（上卷尾）　文曆二年歲次乙未五月二十□□寫□

（中卷尾）　文曆二年歲次乙未五月八日書寫□

（下卷尾）　本記云、

先師傳燈大和尙屬然□□□□（凡四字）典之內是其一也　末資隆譽記之

寫本記云

常喜院眞筆草本書寫畢

□□藏無根努力々々不可及外見云々

建保三年乙亥於高野清淨金剛院僧坊書寫之訖、至于[　　]山未及披露者也尤可□　異學沙門□譽

（凡五字）

建保三年と文暦二年とでは十九年の隔りがある。此の本は、今年秋の醍醐寺に於ける大藏會で、陳列棚の中のを體裁だけ見たが、下卷の奥書は見ないので、心覺眞筆草本、其の轉寫本、建保三年書寫本、文暦二年寫本などの關係は判りかねる。但し醍醐寺本は、文暦二年の寫本である事は認めて可からう。此の醍醐寺本は大正新脩大藏經に收められて居るものだが、寫本と比べると、引用せられて居る書の引用順位に於いて、かなりの相異があり、寫本の方が妥當である。然う云ふ相異の生じた理由は判らぬが、若し醍醐寺本が眞に心覺の眞筆草本であつたとすれば、是れが草本であり、流布本は其の後の整理本であり、そこで兩者に相異が生じたのでは無いかと思ふ。慈雲自記の梵學津梁第四目錄に多羅葉鈔三卷を印融の著として居るのは、印融奥書により、ふと誤りしものだらう。

多羅要鈔の事は大體述べ終つたと思ふが、心覺には他にも此の類のもの、卽ち色葉分類梵語辭書があつたのでは無からうか。此の疑ひは

諸宗章疏錄卷三七八頁に

貝葉集　五十卷　附譯人集一卷

多羅葉鈔　一卷

梵語集　二卷　色葉

とあるので生じる。こゝに多羅葉鈔とあるのは、卷數こそは一致せないが其の書名より云へば、まさに、現存の色葉

分の多羅要鈔三卷の事であると見る他は無い。ところが其れに直ぐ引き續いて「梵語集二卷 色葉」と云ふのがありて、色葉と云ふ註の存する以上は、是れ亦色葉分けの辭書であり、二卷本であつた事が考へられる。しかし乍ら、考へて見ると、同一人であつて、色葉分梵語辭書を二種――それも一卷本と二卷本との相異であるに過ぎないもの――作ると云ふのも變であるとも云へない事は無い。又兩者を合せると、現行の多羅要鈔の卷數と一致するのである事も、見方によつては意味ありげである。斯り考へて來ると、「梵語集二卷 色葉」と云ふのは、現存の多羅要鈔三卷其のものゝ事にて、二卷と云ふのは三卷の誤りであらう、多羅葉鈔一卷と云ふのは、現存の多羅要鈔三卷とは別のものであり、辭書式のものでは無いのではあるまいかと云ふやうな疑ひも生じ、要するに、諸宗章疏錄は、現存の多羅要鈔三卷の事を誤り記して居るかも知れないと云ふ風にも考へられる（目錄類がやゝもすると杜撰に成り勝ちであるのは、人の熟知するところである。悉曇具書目錄は心覺の著として、悉曇鈔三卷、多羅要鈔二卷の二種を錄して居るが、多羅要鈔の二卷と云ふ卷數はいぶかしい。當時二冊本があつたのならば、とにかく、さも無くば、實物を見ずして書いたが爲めに誤つたと見る他は無い。悉曇鈔三卷と云ふ書名も、諸宗章疏目錄には見えないものであり、密教大辭典も心覺の著述中に擧げて居ないものである）。

しかし又、「梵語集二卷 色葉」の存在を認めるに役立ちさうな材料もある。其れは既でに法三宮の梵漢相對鈔の條で述べたやうに、註 梵漢相對鈔五十卷によりて、心覺が、「二帖書」を作つた事を行遍が述べて居る事が其れである。此の行遍の言に相討の理論を加へる事受式であるため、然うて心覺の二帖書の內容は到明せない事は既述の通りであるが、[illegible]

覺の二帖書も亦、色葉分であつたらうと推定したい。殊に心覺が色葉分の多羅要鈔をも書いて居る事を思へば、一層、二帖書をば色葉分であつたと見たく成る。ところで梵語辭書であつて、色葉分であり、しかも二帖であると云ふと、諸宗章疏錄の「梵語集二卷 色葉」とまさしく一致すると考へられて來る。だから自分は、行遍や諸宗章疏錄に從うて、心覺に色葉分梵漢對譯辭書二卷のあつた事を認めたく思ふのである（二帖本の事は、諸師製作目錄三二七頁、釋敎諸師製作目錄三六一頁にも見える。但し兩書とも三卷の多羅要鈔は記して居ない。密敎大辭典は、註、梵漢相對鈔の事は、昭和十年八月發表の拙稿で說いた）梵語集二卷をも認めて居る

然らば、其の二卷本と、現存の多羅要鈔三卷との關係は如何と云ふ事に成ると、何しろ梵語集二卷の實物が見られないから、全く不明である譯だが、臆說を逞しくすると、兩者は全く別種のものであり、或いは梵語集二卷を梵漢相對鈔によりて作つた心覺が、後になつて、積極的に諸書を參考して、多羅要鈔三卷を作つたと云ふのではあるまいか。梵語集二卷は相對鈔の抄出書であるが、多羅要鈔三卷は心覺の獨創書であつたのでは無いか、と云ふ風に考へたく思ふ。

そはともあれ、色葉分辭書の少い時代の事であるから、多羅要鈔の組織が、心覺の獨創であるにしても、既存の書の模倣であるにしても、大いに注意すべきである。殊に、若し、色葉分であつたらしい事の考へられる梵漢相對鈔の模倣であつたと云ふ事が判れば、一層興味ある事と成る。とにかく色葉分類辭書たる心覺の多羅要鈔三帖（及び梵語集二帖）の出現、及び傳存（但し梵語集は佚傳）と云ふ事は、日本梵語辭書史上注意すべき事である。

二

鎌倉室町期のものとしては、現存するたゞ一種のものが知られ居り、文獻所見のもので指摘できるものは無いやうだ。悉曇書の名はかなりに知られて居ても、其れが辭書である事を明記しても居ないからである。さて其の一種とは梵漢和鏡である。

梵漢和鏡　寫十六卷、西大寺叡尊、弘安五年十二月成

悉曇撰書目錄、佛書解說大辭典に見える。興正菩薩叡尊（正應三年八月寂世壽九十歳）の著述にて、同菩薩が西大寺に緣故が深かつたので、今も西大寺に存する。金胎兩部各八帖計十六卷で、胎藏界梵漢和鏡の終に「弘安五年壬午十二月二十三日支時記畢、同十二月二十七日再治畢」とあるから著述年代は明白である。著者は此の時八十二歳の高齡であつた。遺憾乍ら、例により閲讀が許可せられないので、未見にて、組織なども全く判らない。十六卷と云ふから、かなりの分量である。恐らくは意義分類體であらう。書名中の「和」字は若し梵漢を和するとか、又は和鏡とか云ふのでは無いとすれば、梵漢和と續けて、三語對譯と見なければならぬが、果して實際は何うであらうか。梵漢對譯の和鏡（日本製の鏡）の義か。辭書の類に鏡字をつける事は、支那撰述の字鏡、韻海鏡源、龍龕手鏡、字鑑、本邦の新撰字鏡、字鏡集等ど、同じ命名法である。（本書は慈雲の梵學津梁の別詮の中に收められて居るから、一本が河内高貴寺に存するかも知れない。佛書解說大辭典は、高野山の金剛三昧院の大永二年本のみによりて記して居るのだが、何故か著者名も、識語の事も云はない。大永本には識語も無いのだらうか。）

我が國に於ける梵學は、長い歴史はあるけれど程度は餘り高いものでは無く、梵文解讀まで進んだのは慈雲一人であると云はれて居る。だが梵文は讀めなくても、漢字音譯の梵語を蒐集し其れを見安いやうに分類し、辭書類のものを作る事は、特志ある僧侶にとりては大して難しい事でも無く、たとひ梵字が讀めなくても書けなくても出來る事であり、又興味ある事だが、其の仕事は他より見た場合に大いに殊勝に見え、又實際以上に高く評價せられる傾向もある事だから、此の種のものが、精粗樣々の形で出もしたらうが、多くは傳はらないのである。ところが江戸時代に成ると、淨嚴・慈雲・行智の如き學者が現れ、梵學は未曾有の盛況であつたが、高楠博士が「德川時代は字記○慈雲の講述に力を致せるは古代に讓らずと雖、殊にその特質とする所は字書の編述にありとす」（日本梵學史概觀）と云つて居られる位に辭書が出た。博士が日本梵學史概觀で擧げて居られるのは

華梵對翻　四卷　淨嚴　　梵文大例　十四卷　曇寂
梵語雜集　四卷（零本）　曇寂　　枳橘易土集　二十六卷　慧晃
三藏梵語集　百卷佚　興隆　　梵漢通釋　二十卷佚　興隆
名物梵語集　一卷　寂嚴　　梵語略詮　百四卷　慈雲
梵語省要　五卷（零本）　慈雲　　梵語節用集　二卷　慧海
伊呂波梵語集　一卷　智明　　梵漢名句考　百二十卷　大寂
梵漢標目　三十卷　大寂　　採摘枳橘集　一卷　行智
梵漢對譯字類稿　一卷　行智　　梵字字照　三卷　著者不詳

梵名檢據　一卷　著者不詳

の「十七種五百十七卷」（此の開序著名卷數等には、疑問のもの多く、且つ中の幾種かは、易士集、梵語餘用集、梵文入例、梵字字照、梵漢名句表、同標目、伊呂波梵語集の八書だけは、悉曇撰書目錄の梵語字書類にも見えて居る。又右の十七種は、慈雲尊者經御會講演集第二輯所收の博士の講演筆記中にも見える。）で、其の中の慈雲尊者、易士集、梵語餘用集、梵文入例、梵字字照、梵漢名句表、同標目、伊呂波梵語集の八書だけは、悉曇撰書目錄の梵語字書類にも見えて居る。又右の十七種は、慈雲尊者經御會講演集第二輯所收の博士の講演筆記中にも見える。とにかく博士が「梵學最終の業績」と云つて居られるのは、成程と首肯できる。

是れらのもの（自分は其の一部分しか見て居ないが）、卷數より云へば、僅か一卷二卷のものより、百二十卷の大部のものに至るまであり、組織を云へば、極めて便宜的な音分類（五十音分類又は色葉分類）したもの、行智の採摭枳橘抄の如く忠實に摩多體文順としたもの、梵語餘用集の如く、通俗化したもの等があるが、大體は稿本で、其れも未整理のものが多いらしく、刊本は出來るとすぐ開版せられた梵漢對譯字類編以外には、明治に成りて梵語字典として刊行せられた枳橘易士集があるのみで、此の爲めに、江戸期の梵語辭書は、實用と云ふ點では、殆んど無價値と云つて可いのではあるまいかと思はれるのは遺憾である。

四

華梵對翻　四卷、寫、佚か　淨嚴元祿十五年寂

佛書解說大辭典には見えず、悉曇撰書目錄に「淨嚴著、一卷、立花行胤藏」とのみあるものだが、行武善胤氏が、著者淨嚴の教流を汲む寶林教學（寶林は淨嚴の創建した東京本郷湯島の寶林山鐘鼎寺の山號）の諸著を解說せられた鏡雲叢書解題（和、一冊、大正五年十月刊）に「華梵

對翻全四卷は、寶林梵書の最なるもの、吾國學界の珍寶なり。卽ち上人淨嚴一代六十四年、數千の群書に涉獵してあらゆる經書の作りを[illegible]、[illegible]梵漢字[illegible]、行に[illegible]に[illegible]ると、倘譯解字數萬の比にあらず、正に蓮雲の梵漢津梁と結抗すべし。此書近時關東、西海に散佚せるを、余一昨歲之れを將致して、以て寶林に歸り、合はすことゝある。本書が立花氏の藏書であるならば現存して居るかも知れないが、發見者行武氏の言の通り、蓮雲寺に所ありたのであつたとすれば、餘火で亡びてしまつた筈である。（行武善胤と立花行胤とでは名が紛はしいが、行胤氏は立花家へ養子に行かれた由である、善胤氏の息が行胤氏であらう、行胤氏は昭和四年に歿せられた）さて此の書、右の解題では性質が判明せないが、華梵の華は恐らくは中華の華にて、華梵對翻は梵漢對譯の義であらう。但し書名通りに、漢譯語により五十音分類したのであるか何うかは判らぬ。さて淨嚴（覺彥）阿闍梨（元祿十五年六月歿、世壽六十四）は東密中興の高僧で蓮雲寺を開創したのだが、契沖阿闍梨との關係で有名である。契沖の和字正濫鈔は淨嚴の慫慂により刊行せられたものである。悉曇に通じ、此の方面の書を多く著はした。就中有名なのは悉曇三密抄八卷（天和二年六月自序同時刊）であつて、契沖の和字正濫鈔の梵字式新製音圖は三密鈔の梵字音圖の模倣であり、正濫鈔の韻學は三密鈔に基き居り、幕末の黑川春村の如きも三密鈔をば賞揚して居る。いかにも三密鈔は集大成的な判りやすい悉曇書である。

五

枳橘易土集　刊、三十卷（本編二十六卷　附卷四卷）　十五本　慧光、享保元年自序

本書の事は前に「五十音分類體辭書の發達」（國語國文昭和十一年十月號）で述べたから略述する。本邦人の手に成つた梵漢辭書で

刊行せられたのは本書と多羅葉鈔とがあるのみだが（行智の梵漢對譯字類編は後述の如く特殊のものである）多羅葉鈔の刊行は昭和六年十二月の事で、大正新修大藏經に收められたのが最初であり、本書が梵語字典の名で、普勝寺御教科講義錄中にて發見されて開版せられて行つたのが、遅くとも明治三十一年までの事であるのに比すべくも無い（此の本、後の洋裝菊版本では明治三十八年十二月の刊行と成つて居るが、其れは合册本の刊行時である。佛書解説大辭典は帝國圖書館本により、「明治二九―三二刊」として居るが、講義錄を集めて三册に製本した人が、各册に明治三十一年と記して居る本がある。）本書が然う云ふ風に早く印刷せられたのは、本書が相當の分量あり、しかも組織が便利で、其の上稿本の整理が出來て居て、何時でも印刷できるやうに成つて居たからであらう。但し刊本の梵語字典には著者の自序、凡例、他序等全く無いが、是れは感心せぬ。さて本書は五十音分類の梵漢對譯辭書であるが二部分より成り立つて居る。（大谷大學所藏の美濃製十五册の寫本によりて解説する）本編（但し斯かる名があるのでは無い）二十六卷と「附卷」四卷とがあり（悉曇攝書目錄に十五卷とし、日本梵學史概觀や、佛書解説大辭典が二十六卷とするは組である。十五卷と云ふは、本稿・附卷合計三十卷を、十五册にしたものであるべく、二十六卷と云ふは本編だけの卷數であるに過ぎない）、本編は五十音分類だが、附卷は意義分類し、さらに五十音分類したものである。本編は漢字音譯の梵語四千四百五十三を、其の語頭音で五十音分類し（尤もヤ行のイエ、ワ行のキウエヲはそれ〴〵ア行に入れ、濁音は清音に入れて居るから四十四音分類である）、多くの書を引用して詳密な註解を漢文で施したもので、梵語には全部では無いが梵字を朱書して居る。但し、四十四音に當てゝある梵字はカ・サ・ナ・マ・ヤ・ラra・ワvaは普通だが、タ行は普通のtaで無くtaを書き、ハの一部及びホには普通の例に從ひpaを書き乍ら他はbabubeの音の梵字を使用し、それらの四十四音各部へ收載せられた梵語は極めて便宜的に配當せられ居り、例へば日本字音の頭音により、又は梵語の日本流讀方の頭音により配當し、ユ部に維摩羅（梵語ではVimala）が入り、カ部に訶梨跋摩・呵利帝の如きhaを頭音とするものが入ると云ふ有樣である。大體梵語を漢字で音譯するのが漢字音の性質上難しいのだが、其れを克服して音譯する場合には、時と人とにより相異もあり、又音譯

の場合に省略もあり、その漢字音譯梵語が日本に入ると、字音の日本化に伴ひ、日本流の發音と成ると云ふ具合で、梵語の原音とはかなりて異つたもの上成るのだから、然う云ふ譯梵語と五十音分類との場合に、[illegible]るのは當然で、平安朝の心覺にすでに先蹤があるのであり、著者は凡例中で斷つて居るのだから、先づ〳〵恕すべきである。次ぎに附卷は梵語四千四百五十九語を十五門に意義分類し、さらに各門の中を五十音分類したもので、簡單に譯語を施して居る。一體辭書としては音分類と意義分類と、の兩方が存するのが便利であるから、著者は音分類の本編に索引的な意義分類體の附卷を添へたのであり、甚だ周到である。さて本書は京都雙丘法金剛院の彗晃の苦心の著で、蒲柳弱質の身で二十餘年間かゝりて作りしもの、享保元年「僧自悉日」の自序があるから、其の頃即ち安居終了の翌日七月十六日頃に成りしものだらう（悉曇撰書目錄も佛書解說大辭典も、共に自序に言及せず、成立年代の事は全く觸れないのは、「解說」としては當を得たものでは無い）。引用書目には藏經外のものも多い、皆居士撰述の章疏類で、辭書としては義楚の釋氏六帖、慧琳、希麟、可洪等の一切經音義、義淨翻梵語（實は眞諦であらう）等を引くが、行瑫の「一切音義五百許卷」を擧げて居るのはいぶかしい、行瑫の內典隨函音疏は第三百七、小乘律之一の一卷の宋鈔本が、支那より數年前にもたらされ國寶と成つたのが存するだけに過ぎないからである。枳橘易土集と云ふ面白い名前は、江南の橘が江北に移されると枳と變ずと云ふ諺（此の諺、序の朱記入に考工記の「橘踰淮、化爲枳」を擧げて居る）に基づく事は云ふまでも無いが、語の譯語の書だから此の凝つた名を與へたのだらう。佛書解說大辭典はキキツヤクドシフと訓ませて居るが、ヤクドと云ふ必要があるか何うか。同辭典は枳橘易土集の條でも、梵語字典の條でも、採埆易土集を別名として居るが、其は誤である、後述する。密教大辭典によると法金剛院に原下本を藏するとあるので同寺へ照會したが、同寺は由緒古き寺なるも維持困難で荒廢し、寺寶は本

山たる大和唐招提寺に預けてある由で（昭和十年十二月照會）まだ見て居ない。版下本には谷大本にも無い知恩院の徹定上人の序もあると云ふ。慈雲の梵學津梁の別記にも收められて居るが、其れには各記に梵字を加してある由、[illegible]

錄によると、東京帝大梵文學研究室には慈雲自用の十五卷本があり、梵字の自筆書入れが多いと云ふ。大谷大學本十五冊は、本の順序に誤があり、第二、三は附卷の四卷二本であるから、本は1 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 以上本編 2 3 の順序に改む可きである。各冊はすべて二卷づゝを收めて居る。哲學館本の底本は知らぬが、附卷の部は「索引」と成り、略註も無くて梵語字典の頁數を記して居る。さてこの易土集を整理したのが、行智の採摭枳橘鈔六卷であり、此の本の事は行智の條で述べる。

六

梵字字照　三卷、寫　著者不詳、享保十二年十一月以前の書

悉曇撰書目錄に「望月信亨藏」と記し、終に「享保第十二年丁未十一月二十四日書寫竟、竹田妙音院法淵」とある由記し、又同博士の日本梵學史概觀に名をあげ、著者不詳として居るものだが（佛書解說大辭典は右の識語はあげず、大日本佛教全書續刊豫定書目に入る事を記す）、一度拜見致したくて、望月博士令息信成氏が未だ京都恩賜博物館に勤務して居られる昭和八年十一月頃、藤堂祐範氏を介してお願ひしたところ、東京の御宅でも探して下さつたが所在不明で、或いは某博士のところへ以前に貸したまゝに成つて居るらしいので、先方へお尋ねして居るとの事であつたが、未だに拜見の機會を得て居ない。

七

梵文大例　寫、十四卷、曇寂、元文三年十二月成

著者の事は、密教大辭典に

、ドンジヤク　曇寂　一三三四―一四〇二

山城五智山の學僧。字は惠旭、俗姓牧野氏、清和源氏六孫王經基の裔なり。延寶二年備後福山に生る。年甫めて十三、同州明王院宥務に投じて薙染受戒し、元祿二年秋十六歲にして五智山禪杲に隨ひて瑜伽經を學び、早く顯密二教の大義を領す。同六年禪杲より具支灌頂を受け、同十一年夏本師宥務に隨つて兩部灌頂を重受す。時に本師並に明王院の衆徒等、師跡を嗣がんことを懇請せしが、師固辭して受けず、之を法弟宥辨に讓り、寶永四年定光寂後五智山の席を董し、正德四年秋宥辨早世せしかば、遂に明王院を兼務す。居ること三年之を觀意に讓り、五智山に歸錫して專ら著述に從事す。又東寺觀智院賢賀に就て一夏九旬悉曇字記を學び、所聞を記して字記臆推記六卷を著す。その明王院に在るや灌頂壇を開く、阿闍梨位を受くるもの二十員、結緣灌頂に浴するもの一萬三千餘人なりといふ。寛保二年十一月十一日寂す、壽六十九、臘五十七。五智山に葬る。師は宗學に一家見を有し、密教の教主につき、本地・加持和融說を唱道し、又地藏院流の達匠として聲譽一世に高く、弟子に常明・寂嚴あり、常明の學脈は豐山に入りて法住僧正の本加和融說の大成となり、寂嚴は梵學に秀で、その學脈は慈雲尊者に至りて梵學の大成となる。

とあり、著書は八十二部四百十五卷あり、梵語關係のもの七部がある由で、其の中の梵文大例が辭書であるのだが、其の撰書目錄に「梵文長行、分字五卷」として、一・五・六・十三・十四の五卷が眉中寶島寺に存する由を云ひ、その十四卷の尾に

元文三年歲次戊午十二月時日閼筆

洛西五智山沙門 Dharma-śauri（梵）

とある事を記して居る。これならば十四卷で完結して居るものなる事は明らかだから、卷數未詳の註は不要と成るのだが、昭和十年十月に刊行せられた智山學匠著書目錄には、十四卷の完本が智積院に存する事を明記して居る。其の本は亦名を梵文義章と云ひ、天保十四年歲次癸卯七月二十日に、七十一歲の隆珍が寫した本であるが、隆珍は智山三十三世で此の本は、昭和十年五月の調査で所在が判明したものである（中外日報五月二十三日に記事見ゆ）佛書解說大辭典は智積院本を擧げ乍ら、肝心の元文三年の識語を擧げないのは、全く不思議千萬である（智積院本に識語のあるのは智山學匠著書目錄で明白である）

八

梵語雜集　四卷、寫、曇寂

これも曇寂の撰で、日本梵學史概觀に字書として擧げて居るもの（撰書目錄には見えず）、但し零本の由である。四卷存するが其れが零本であるのか、全四卷の中、何卷かが殘つて居ると云ふのであるかがはつきりせない。本書の名は、慈雲尊者續仰會辭演集第二輯所收高楠博士の辭演にも見える、佛書解說大辭典は擧げや、密教大辭典が梵文雜集三卷と擧げ

て居るものが、これであるらしい。慈雲の梵學津梁別録に收められて居る筈で、第二・第四・第五・第六の目錄に見えるが、第六には「上中下三、内上紛失二冊」とあるから三卷と云ふのが正しいらしい。三卷の中、上卷の失けた卷は

である。

九

三藏梵語集　百　卷佚　興隆

梵漢通釋　二十卷佚　興隆　寶曆十二年成

二書ともに佛書解説大辭典は擧げず、日本梵學史概觀に「俱佚」と見え、又慈雲錢仰會讃演集にも見えるもの、佚書である以上は、辭書であるか何うかは判らない筈であると想はれるが、とにかく擧げて置く。さて悉曇書と云ふと、普通は台密東密等の密宗關係の人の著述であるのだが、本書の著者は曹洞宗の僧であるから珍しい。しかも此の人、禪僧に似合はず、神道や源氏萬葉等の國書に關する著述までし、さらに、佛典疏鈔目錄を編纂して居る。佛家人名辭書は、興隆自記、彼れの生家高橋家の系圖、住職した埼玉の全久院過去帳、近代名家著述目錄の四種により傳を書いて居るが、はじめの方を引くと

武藏埼玉全久院の第六代なり、興隆字は寶嚴と云ふ、越後の人、高橋氏なり、世々彌彥山の禰宜たり、父は太郎右衞門光宣、母はお喜多と云ふ、四男あり、師は其第三男にして、俗名谷伴藏と云ふ、十四歲にして禰宜の家を捨てゝ沙門となり、初名を慈海、字を具海と云ふ、幾もなく出遊して比叡山の鑑空、三井寺の義瑞、五智山の如

幻、浪華の天龍を歴問して台密の疏章、並に義軌を學び、且つ鳳潭を問うて華嚴を學ぶ、後南北に巡遊して、法相、三論、[illegible]を用ゐ、舊新翻譯の列等を集めて大成せり、寶曆の初武藏埼玉郡四の金久院の第六代となり、同院にありて學問著作を專として、餘事を顧ず、寶曆十年正月、櫻井流神道祕傳二十四册、源氏物語採海鈔二百五十卷、萬葉集義述百四十八卷を故郷の實家に送附し、神道書和歌書四千卷を同院に寄附す、同十二年梵漢通釋十五卷を撰して同院に寄附す、後州傳寺に遷り、同寺第十二代となり、明和六年十月二十六日同寺に寂す、壽七十九なり（希云、梵漢通釋十五卷は二十卷の誤だらう）。

とある。著述は内外典を加へて八十五部七百五卷と云ふ。書名は皆かゝげてあるが、近代名家著述目錄の尾にも大分に見えるし、興隆目撰の佛典疏鈔目錄にも自著を錄して居る。今梵語關係のを擧げると（目とあるは、佛典疏鈔目錄に見えるもの）

三藏梵語集	百卷	目	梵漢通釋	二十卷
悉曇傳本	十五卷		慧琳音義梵語略	三卷
淨土論梵語釋	三卷	目	悉曇字記相傳記	一卷
悉曇字記略祕訣	一卷		悉曇字記開玄章	一卷 目
梵語釋例	一卷		可洪音義梵語略	一卷
十二吉祥天經梵語釋	一卷		盂蘭盆經梵語釋	一卷
梵語釋文	一卷			
無量壽經梵語釋	三卷			

これからのものは疏鈔目錄にのみ見ゆ

觀無量壽經梵語釋	二卷	阿彌陀經梵題鈔	一卷
阿彌陀經梵語釋	一卷	法華科條記	一卷
悉曇祕略釋	一卷		

等があり、國書に關するものには

源氏四河入海	三十卷	源語祕傳錄	三卷
源氏祕訣傳	三卷	百人一首三家祕傳	二十卷
百人一首傳入錄	二卷	紀歌八代祕要	十二卷
萬葉集義訣	一卷	字類抄語口訣鈔	七卷
字語抄集	一卷	古今集三要	七卷
徒然草玉芽祕解	四卷	徒然草祕訣	一卷
和歌八十玉鈔	一卷	和歌仙傳	三卷
詠歌大概註解	二卷	以呂波本紀	二卷
神代卷略註	一卷		

等がある。此の和書に關する著述類は、秋隆と同時代の眞淵のに比べて、何れだけの差が存するか知らぬが、たとひ神道學問の進捗にして、今日から見れば殆んど價値が無いものであるにしても、とにかく著述の分量から云へば驚くべき事である。しかしてこれらの著述、現在傳存して居るか何うかを知りたくて、北埼玉郡水深村全久院へ照會した

ところ、住職石島玄龍師の返書（昭和十年十二月十八日附）に、全久院は三度も火災にかゝり、書籍類など全く無く過去帳あるのみの由、其れには世壽が七十五歳とあるので、佛家人名辭書に七十九歳とあるのと合はない

次ぎに興隆の生家高橋氏のある彌彦山の彌彦小學校へ照會したところ、同校の「郷土研究係」よりの簡單な返書に（昭和十年十二月十二日附）高橋氏は明治初年まで伊夜日子神社の世襲神主であつたが、制度變り、他府縣より官任命の宮司が來るやうになり、それでも高橋氏は其の下で禰宜として奉仕して居たが、大正十四年急逝し、當主は當時遊學中なりしため禰宜にも成らず、なほ高橋氏は本家と分家との兩高橋あり、兩家ともに當主不在である故、興隆が何れの高橋の出であるかも判らず、又明治末期に彌彦には大火ありし故、資料は殆んど無く、彌彦本高寺（曹洞宗）にも何も傳は無いとの事であつた。自分はさらに曹洞宗出身の史學者で宗史に造詣深い史料の大久保道舟氏に興隆の事をお尋ねしたところ、氏も佛家人名辭書の記事以外の事は査べられた事無く、同書に引く興隆自記と云ふのは、其の著はした悉曇書の末尾に記しありしものゝ事であるが、其の本は湯島の靈雲寺にあつたのだから、震火で燒失してしまつた由である。斯うして見ると、興隆の書は名のみ殘りて、實物は傳はらないものゝ如くであるのは遺憾である。（但し高楠博士が「佚」と書かれたのは、大正十一年十月の刊行の悉曇具書中に於いてゞあるから、興隆の二辭書の佚亡は震火によるものでは無いらしい。右の二書が辭書である事は、所謂興隆自記に見えたのであらうか。）

一〇

名物梵語集　寫、一卷　寂嚴

これも佛書解說大辭典には見えず、高楠博士の日本梵學史概觀や慈雲鑽仰會の講演に名が見えるのみ。寂厳は備中寶島寺の僧、元祿十五年に生れ、明和八年三月示寂した、壽七十、其の書は喜ばれて居る。京都五智山に寂厳に師事した事もある。續日本回僧傳は寂厳に關する資料を數種錄しては居るが、此の辭書は擧げて居ない

一

梵語節用集　寫、二卷四册　慧海　明和三年七月十五日自序

佛書解說大辭典に見えず、悉曇撰書目錄に「慧海著二卷　桑原大英藏」とあり、序の終の日附を擧げて居るもの、その二卷本は未だ見ないが、京都帝大圖書館の新寫本の尾には

大正元年一月十日梵語節用集四册一閱了

梵語字典集成中ニ加フルニ決ス

高楠順次郎（以上朱筆）

梵語節用集（原本四册ナリシモ約縮シテ三册トナス）

大正十二年五月二十一日寫了

京都帝國大學圖書館

とある。すると原本は二卷四册であつたのを、京大本は勝手に三册にしてしまつたらしい。四册としての分册は判らぬが今の三册は、第一自伊至與、第二自太至阿、第三自左至寸の分册である。卷頭の叙に

……是故如レ余愚蒙者臨レ閲二讀內典一往々遇二梵語一宛牆レ面而輒不レ能レ通二其義一於レ此參二考群書一以配二四十餘音一部分二十二門一惟二委邦流布兎園册子一題號二梵語節用集一是併授二我門初學烏摩羅徒一欲レ爲二一助一耳……

明和丙戌夏則佛歡辛日於二皇都綾小路神明廟護國山立願寺寶相軒一圓乘沙門　定慧海謹識

とある。文中の烏摩羅は童子の義、神明廟は綾小路の神明町（東は高倉、西は東洞院）の北側に存した事が古い地圖に見え、都名所圖會卷二、雍州府志卷二、神社門上愛宕郡條にも記事があり、源三位頼政が禁中に怪鳥を射る時祈つたからと云ふので頼政明神と云ふとある。こゝに寺と廟と一體の立願寺があつたので、中古は天台宗護王山立願寺圓光院と號し社僧が居たのだが、維新の時神佛分離した。寺は今無い。この寺の慧海が著者であつて、明和三年七月盂蘭盆會の日に此の叙を書いたのである。さて叙の次ぎに凡例、引用書目（略號も記す、佛典や悉曇關係書は無論のこと、漢籍や、日本紀・古語拾遺・萬葉・和名抄の如き國書までも引く）、梵語緣起、飜譯由來、新譯舊譯辨、五種不飜論などの如き總論的なものを記して居るが、皆漢文である。部門は天文、時候、地理、五行、有情、身體、飲食、衣服、器財、數量、言語、雜集の十二種だが諸門の意味は凡例に詳しい。爲・於・惠は立てず、曩摩の如きは、ナに入れずノに入れると凡例に斷つて居るが、皆初學の徒のために輕便にしたものである。梵字は書かず、梵語は漢字の音譯で擧げ、片假名で發音を示し、其の譯語は無論漢語譯にして長文のもあるが、音や訓は片假名で施して居る。イロハ分類の最後に梵倭相似類語（空の事を國記でソラと云ふが、梵語でも素羅と云ふ、此の類の語を天文・時候等に意義分類したもの、色葉分類は無い）、天地東西南北梵語、春夏秋冬十二月梵語、五行五色五常梵語、六根六識梵語、從一至億兆數量梵語、天笠國風總論、五天竺八十國名等の附錄がある。

梵語略註　百四卷　慈雲文化元年寂

梵語省要　五卷寫本　慈雲

右は高楠博士の日本梵學史概觀や慈雲尊者鉗仰會講演集第貳輯所收同博士の講演に名のみ見えるものだが（悉曇撰書目錄はあげてよいかは疑はしい、後述）。

梵語省要を寫本とする事は、概觀によるのである（さて此の二書、斯う云ふ風に擧げず）。

眞言宗正法律の開祖、河內葛城山高貴寺の慈雲尊者飲光（享保三年生、文化元年十二月二十二日寂、壽八十七）が梵學の大家であつた事は今さら云ふまでも無い。我が國の梵學の歷史は奈良期以來隨分來長いものではあるが、弘法大師でさへ梵文を解讀せられたか何うかは疑はしいと云はれるもので、たゞ梵字を書き、其の發音を知り、綴字法を知り、字義字相の如き哲理を說くのが普通で、蘇漫多聲・底彥多聲の如き文法關係の事柄の考究は顧みられず、其れを考究しても、言語の性質を異にする梵語の文法を、漢語譯の斷片を通してやるのだから、殆んど不可能と云ふべく、從うて長い間の悉曇研究も悉曇字記の註釋程度のものを出でず、梵文を讀む事などは思ひもよらなかつたのであるが、慈雲は獨學で梵文解讀に努力して、當時としては空前の大事業を成した譯であるが、其れでも折角の努力は、充分な成果を得るには至らなかつた。蓋し慈雲の得た梵文典の智識と云へば、唯識樞要や慈恩傳中引用の八轉九例を土臺とし、其れに支那の論疏所引の もので補うたのだが、斯くの如く材料が貧弱であつたのである。しかも支那語の性質上、性質を異にする梵語の文法を說明するに適せず、漢譯の材料を通して梵文法を理解するのは至難であつたのだ。泉芳璟氏（「梵學津梁を論ず」大谷學報九ノ二、昭和三年五月號）

に據ると慈雲の「文典的說明を一々評し來れば殆んど總てが誤解であり、牽强附會である」若し其れ訂正を加へんか、[illegible]（[illegible]）[illegible]ものと[illegible]ものとなるべく[illegible]狀態であると云ふ。新くの知くであつたのは遺憾だけれど、致し方の無い事である　此の慈雲が門下と共に古よりの梵學關係の資料を及ぶ限り集め、其れに自筆を加へて編纂した一大叢書が梵學津梁一千卷であつて、其の總目錄は大正新脩大藏經（第八十四卷參照）に收められて居るが、津梁が集大成の叢書で段々增加して云つたのだから、從つて其の目錄も種類が多く、大正藏經所收のもの以外にも、慈雲尊者全集第九輯下所收のものが六種もあり、其の中に大正藏經本と同じやうなものもあるが、必ずしも同じでは無い。今藏經本により云ふに、津梁は、日本現存梵文資料を集めた「本詮」、其の解釋たる「末詮」、文法を說く「通詮」、梵學關係の支那や本邦の著述を集めた「別詮」、語彙集の「略詮」「廣詮」、拾遺的なもので、直接梵學には關係が無いけれど、梵學研究の參考に成る諸書を集めた「雜詮」の七詮より成るのだが、此の別詮には、梵語雜名、翻梵語、多羅葉鈔、梵漢和鏡、疊寂の梵語雜集、慧苑の枳橘易土集などを收め、七の雜詮には、韻鏡や新井白石の采覽異言其の他和闐・蒙古・韃靼等の文字を收めて居るが、第五の略詮と第六の廣詮とが慈雲の編した辭書である。

卽ち略詮は音分類で雜多雜文順のもの、廣詮は意義分類のものである。先づ略詮の方は大藏經本目錄には第四六三卷より第五八八卷に至るとし、（計百二十六卷である）其の內容を

梵語字彙	百四卷	梵語省要	五卷
梵語要省	五卷		

と記して居るが、卷數は一致せない。全集本の第四の目錄は慈雲自筆だが「自三百六十三」至五百八十八」として居

るから、今記したのよりは百卷多く、二百二十六卷の筈だが、摩多體文順のもの百十七卷（一々擧げてあるが、「不次第、且有二不足一」と斷書がある、「二卷カ」と云ふ類のものもある）と「省要　五卷」「要省　五卷」とを擧げ「都百二十五卷」と記して居るが、これも卷數は合はない。第三目錄も亦他書を要へぬ慈雲目錄であるが摩多體文の所の卷數は判然とせぬ、「省要」「要省」は三卷づゝである。同じく慈雲目錄の第二目錄では自三四百六十三至三五百八十八」とあるから、百二十六卷の筈だが、摩多體文順のもの百二十卷（これにも「三卷カ」と記して居る類が少しある）と、「省要」「要省」各五卷で計百三十卷である筈だが、「凡百二十五卷許金草未得詳許」と斷つて居る。慈雲自ら記しながら此の通りであるのは、稿本だから、自身にも卷數がはつきりせなかつたと云ふ樣な事情があるのだらう。とにかく略論の中には、摩多體文順の部と、附屬的な「省要」「要省」各五卷が存した事を認めねばならぬ。大藏經本目錄が其の摩多體文順の部を「梵語字彙」と記して居るのは、慈雲の命名と見て可いのだらう。要するに「梵學津梁略論」は「梵語字彙」「省要」「要省」の三部より成り立つものと信ぜられるから、日本梵學史大觀に

梵語　軒論　　百四卷　　梵語　省要　　五卷（零本）

として擧げてあるのは、實物を見ないものには、理論上妙に思はれる、現存本には斯くあるのだらうか。なほ省要を擧げ、要省は擧げず、其の省要を五卷零本と記して居るのは、要省は傳はらず、省要五卷も其の中の一部が存するのみであると云ふ事だらうか。

次ぎに廣論は意義分類である。大藏經本目錄には、佛號、佛總號、法藏諸目、賢聖階位、法相差別、國界、天衆、天趣、人趣、阿修羅等八部、諸畜生、諸餓鬼　諸地獄、人事、時令、草木、の十六門分類で律梁としては、第五百八十五卷から六百十五卷に至る三十一卷だとして居るが、全集第四目錄では「自三五百八十五二」とあるだけで卷數不詳、

佛總號、佛別號、……國界、天衆……と成つて居り、第二目錄ではやはり第五百八十八卷よりとして、佛總號、佛別號、天衆等が存するのは同じだが、也て香華、資具があり、これらは廣詮中にありても不思議は無いが、これらとは全く種の異る六目錄に二十卷、同義疏二本十二卷、十四卷、圖像卷十卷、於遮圖像十卷、其の他雜部關係の書六部を收めて居るのは、これらが、廣詮の部に入る可きもので無いから不思議である（卷數はいぶかしいものだけを除くと百四十九卷と成る）

以上の如き分類と大いに異るのが第一、第五目錄の分類であるが、第一に比べると第五の方が整うて居る。其れによると、廣詮は佛・法・僧の三寶、それに國界、人天、八部の六大分類をし、さて其の中を細分したものらしく、記者不明の第五目錄で示すと左の如くである。

三寶　佛總號　佛別號　法通號　七佛　三十五佛　六方佛　諸經陀羅尼諸佛　貽蔗諸尊名號　金剛界諸尊梵名并雜諸尊名　以上佛寶部五卷

法寶　通號　三藏　十二部經　經目　律論　染法聚　淨法聚

僧寶　通目　菩薩　緣覺　堅聞　諸三藏　諸法師　賢聖　十地　諸論師付諸國王居士　ウバソク　ウバイ

國界　通目　淨土　諸天　諸國　村邑　伽藍　山海林

人天　天總號　人總號　諸天　星宿　國王　后妃　四姓總號　神仙　外道

八部　鬼畜　惡趣　通用　器財

此の目錄も六部變である。はじめの「三寶」は「佛寶」とある可く、「以上佛寶部五卷」は無くて可いもの、「法通號」も「法寶」のと重複する、「國界」の「諸天」と「人天」の「諸天」、「國界」の「諸國王」と「人天」の「國王」とも重複する。此の目

錄も完全とは云へない。がとにかく實物は見なくとも　これらの目錄より、廣詮が翻梵語式の意義分類であつた事が想像せられる。しかして廣詮が辭書である事は目錄を見たゞけで察せられ、現に泉氏は佛書解說大辭典で辭書だと云つて居られたが、日本梵語史概說に辭書扱ひして居ないのはいぶかしい　さて略詮にしても廣詮にしても未完成の辭書らしく見えるが、泉氏も明言して居られる。要するに慈雲の辭書的業績は

(甲)梵學津梁略詮　(一)梵語字彙　卷
　　(二)梵語省要　五卷
　　(三)梵語要省　五卷
(乙)梵學津梁廣詮　卷

の二類四種と云ふ事に成る。津梁は大半が今なほ高貴寺に保存せられて居ると云ふが、略詮や廣詮が何の程度に殘つて居るのかを示したものは無い(省要五卷は零本とあるが、解說大辭典は零本と云はず、其の現存する事を記し、大日本佛敎全書續刊豫定書目に入ると記して居る)。

一三

伊呂波梵語集　寫本一卷　年代不詳　運淸智明文化十年寂

鑁雲叢書解題に「梵語の字彙なり。美濃判紙百三十二紙。五十音順により梵語を韻彙排列したり。一々原語の下に漢譯を附す。未だ完成を見ずして止みたりと雖も、又以て如何に其努力の非常なりしかを見るべし。……實に本書は淨嚴大和尙の華梵對翻兩卷と共に學界稀覯の珍籍にして、梵漢字典中の秀逸……類本絕無。今雲嶺の寶庫に和尙の眞蹟

一本を藏す」とあるが、悉曇撰書目錄によると、伊呂波梵語集の伊呂波は梵字で書いてある由である。伊呂波梵語集と云ふ名の書が、五十音順であるとは、何うした事か。恐らく、伊呂波頃の誤だらう。所藏者の事、悉曇撰書目錄に行武善胤師の藏とありて、雲龍卽ち東京本郷區湯島の靈雲寺にあるとは記して居ない。靈雲寺の藏書は震災で全部燒けた由だから（昭和十年七月同寺に至り確めた）もし同寺にあつたのだとしたら、燒失した事であらう。著者は靈雲寺第八世で、武藏人、元文元年に生れ、文化十年二月十二日に寂した、壽七十六歳。本書の事佛書解說大辭典に見えず。

一四

梵漢名句　寫、百二十卷三帙、但數册缺く　大寂撰

梵漢標目　寫、三十卷清草二本あり、數册缺く　大寂

悉曇撰書目錄に

梵漢名句考大寂著　百二十卷　京都智積院藏

文化六年四月より文政二年四月に至る十一年間に於ける大寂の編纂にして、慈雲歿後に出でたる唯一の大著なり（以下大寂の略傳を、百二十二字で示す、悉曇撰書目錄としては珍しき事なり、後に引くから今は略す）

梵漢標目大寂著　三十卷　京都智積院藏

本書は梵漢名考の省略せられたるものにして、他の請を入れて之を作る旨の序記ありとあり、日本梵學史概觀に

大寂の梵漢名句考百二十卷、梵漢標目三十卷（新發見）

とあり、東京の智山專門學校が日本佛教學會第八回大會の當番校として、昭和十年秋に編纂した智山學匠著書目錄（其の十月刊行）には、（珍稿解説とは無關係で）「梵漢標目（寫）　三〇卷・完　智專藏」「梵漢名句（寫）　百二十卷・完　智專藏」として擧げ、前者については「卷頭云、梵漢標目卷一　沙門釋大寂集（文化亥五月十四日）余編集……（○希云、此の序今省略し後述す）」備考　大寂ノ直筆本　淸書二本アリ、淸書本ニハ二十一、二十九、三十ノ三卷缺、草稿本ニハ十九、二十一ノ二卷缺」と記し、梵漢名句については「第一卷奥云、文化己巳安居之初起首五月十二日閑筆、第百二十卷奥云、文政戊寅四月八日抄了」備考　自筆本ニシテ文化六年カラ文政二年マデ十一ケ年間ニ著スモノ、第六十九、百〇五ノ兩卷缺」と註して居るが、此の書も佛書解説大辭典は採錄して居ない。他は知らず、梵語辭書に於いて斯くの如き不備の點あるは、何うした事だらうか。（「奥云」、後述の如く實は表紙に書いてあるのだった）

さて右の大寂の二書、自分は幸にも昭和十年七月二十日に見る事を得て、其の一月後に解説をして置いた。以下に記すのが其れであるが、其の頃は智山學匠著書目錄も出來て居ないのであり、又是れを見たのが、昨昭和十四年末かに自ら此の目錄を購入したのが最初であるから、昭和十年八月頃の自分の考へと、目錄の記すところが齟齬して居る事も知つた。今稿を整理する際に、然る可く改めた。

大寂は德川末期の梵學の大家であるが、梵漢對譯辭書として梵漢名句百三十卷を殘し、其れを縮約して（但し組織は變つて居る。後述する）梵漢標目三十卷と爲したのであつて、兩書の自筆稿本が、危いところで燒失せんとし乍らも、先づ完全に現存して居るのである。兩書とも智積院の所藏であるが昭和十年夏頃は東京帝大梵文學研究室に寄托せられて居り、

自分も見せて頂き、學者苦心の大作が將に震火のために灰燼と成らんとして、際どいところで助かり、極めて少し乍ら本の頭の所が焦げかけた狀態で殘つて居るのを見て、感慨を催したのであつた。此の二書稿本だから、とても是れが印刷せられると云ふ可能性は無く、恐らくは、永久に名のみは傳へられて、姿は特殊の學者の眼からも隱れてしまふのであらうと考へるから、此の機會に自分の見たところを記して見ようと思ふ。先づ梵漢名句より述べる。

意義分類體漢梵對譯辭書の著者自筆稿本にして、縱九寸五分、横六寸五分位の紙縒の假綴本で、表紙と云へば、勿論本文用紙と同じである。一冊の紙數は多くも無い。自分が見たのは二帙に收められた七十七冊であるが、一帙の高さは六七寸もあつたらうか。稿本であるから、紙を中間に一丁補足したもの、一部分の切り張り、押紙、朱書、欄外書入、胡粉による抹消と記入などは夥しいものにして、本としては極めて汚いものであるが、其れだけに又著者の苦心の跡を偲ぶに足るのである。

卷數は悉曇撰書目錄に百二十卷とあるから、自分の見た二帙七十七冊は丁度全體の三分の二に當るので、自分は三帙本の第三帙が震火で燒失してしまひ、二帙だけが殘つたのだと獨り合點か何かで信じて居たが、智山學匠著書目錄に「百二十卷、完」とある事を見て、自分が見せて貰うたのが、第一・二の二帙分に過ぎないのであつた事を知り、第三帙を見なかつたのは遺憾に思ふが、第三帙が燒失したので無い事を知つたのは喜ばしい事である。但し此の百二十卷と云ふ卷數は、梵漢標目の序には「一百三十卷」と明記して居るので怪しいが、百二十卷しか無く、其れで完本であると云ふのだから、著者が百三十卷と書いたのは思ひ違ひと見れば可からう。註一 次ぎに書名だが、自分の見たところでは梵漢名句とありて、梵漢名考とか梵漢名句考とか云ふ名は無かつたと記憶して居るが、梵漢標目の自序には「梵漢

名考」と書いて居り、悉曇撰書目錄には二名を一緒にして梵漢名句考と記して居るが、これは何うなんだらうか。何所かにさう記して居るのだらうか。名句は名目や句と云ふらしいから語彙集の名としてふさはしいが、其の名句を考證したと云ふので、名考とか名句考とか云ふのであらうか。今は名句に從うて置く。智山著書目錄も名句考とはして居ない。[註二]

第一册には序文も署名も無く、全標のどこにも大寂の名は見出せなかつたやうに覺えて居るが、梵漢標目と比較すると、稿本としての體裁、筆蹟、其の他から同一著者の稿本である事は何人にも直ぐ認められるのである。

自分は何うした譯か氣附かなかつたが、第一卷の奥に「文化己巳安居之初起首五月十二日閣筆」とあると云ふ。安居は四月十五日より始まるから、文化六年四月十五日より書き出し、其の五月十二日に第一卷を卒へた事が判るが、これは蒐集した材料を整理して第一卷を一往書き上げた時期を云ふと見るべきである。さて第百二十卷の奥に「文政戊寅四月八日抄了」とあるので（この卷自分は見ず）文化六年四月から文政二年四月に至るまでの十一年間の仕事であると、悉曇撰書目錄も、智山學匠著書目錄も記して居るのだが、文政戊寅は元年であり、二年では無いから、此の誤はいぶかしい。とにかく此の奥書を信ずれば、一見したところ、撰書目錄や著書目錄が誤寫したやうに、文政元年四月八日に、梵漢名句の稿本が出來たやうに見えるが、これは後述する如くに、確かに誤りである。なほ、此の一文政戊寅四月八日と云ふ日附も甚だいぶかしい。文化十五年が文政と改元せられたのは、四月廿二日であるから、四月八日に書いた筈の奥書には「文化戊寅四月八日」とある可きだ。故にこの日附は明らかに四月八日に書いたものでは無い、文政と改元せられた後に記入したものと見るべきだ。[註三]

本文用紙と同じ表紙には、其の册の內容を示す「香部」「菓部」と云ふやうな記入があるだけで、第何卷とは書いて無いのだが、幸ひにも、恐らくは研究室に寄托せられる際にでも施されたらしい所の、册序を示す算用數字が印記してあるから（大學が何によりて此の順序を定めたかを知らない、斯う云ふ意義分類のものでは、順序は著者自身にも定め難い筈である。但し第一册には、起筆の年月日が記してある由だから、これだけは第一册である事が確かである）、今其れによりて、七十七册の內容を示すと左の通りである。（香部・菓部と云ふ風に書いてあるものと、單に「藥」とありて藥部とは無きものとが交り、前者の方がやゝ少くて三十四部であるが、今は便宜上部字は省く事とする（但し必要なのは記す）。

○第一帙　四十五卷　四十二册（但し中第八卷缺）

1 香　2 藥　3 菓　4 樹
5 草　6 花　7 菜
8 穀（但し今は無し、第七册の表紙に「8穀部缺」と朱記して居る、8だけは印刷）　9 食　10 眼部　11 耳部　12 鼻部　13 口部（此の四部合綴一册）
14 身　15 病　16 意　17 顯色
18 形色　19 聲　20 八聲部　21 天子別名
22 天女別名　23 天魔　24 毗那夜迦　25 曜宿別名
26 諸鬼別名　27 諸龍別名　28 藥叉別名　29 羅刹別名
30 阿素羅　31 諸仙人　32 諸神別名　33 執金剛及明王明妃部　35 十號
34 乾達婆、羅刹羅、持咒王、加樓羅、鳩槃茶、緊那羅、毗舍闍、陀那婆
36 釋尊別號　37 諸佛別名　38 佛頂部

39 佛頂部（註四 こゝに佛頂部が二つあるのは、自分の抄記の誤りかも知れぬ、又は二卷であるかも知れぬ）
40 金剛界卅七尊部
41 理趣會十七尊
42 諸 觀 音
43 菩 薩 通 稱
44 菩 薩 別 名
45 滅 後 菩 薩

○第二帙 三十七卷 三十七冊（但し、此の中の第六十九の一冊は缺く）

46 壁 間 總 稱
47 聲聞比丘尼別名
48 滅 後 聲 聞
49 緣 覺 總 別 名
50 傳譯儒釋經素
51 在家男女別名王公臣庶
52 外道名計（今思ふと計字は自分の抄記の誤りかも知れぬ）註五
53 諸 山
54 諸 水
55 地土沙石田苑林野城市街巷村里場圃總名
56 宮 室 總 名
57 塔寺祠天 總 名 附
58 塔 寺 別 名
59 親族男女通稱
60 種 族
61 衆生名比丘、比丘尼、式叉摩那、沙彌、沙彌尼、優婆塞、優婆夷、近住
62 舍 識 通 稱
63 王 庶 通 稱
64 廿 七 賢 聖
65 僧坊分職管屬僧尼附
66 衣 材
67 裁服部上法衣
68 裁 服 部 下俗服
69（缺）
70 時 分
71 天 文
72 天 器
73 數 量
74 升 合
75 尺 度
76 斤 兩
77 衆 寶
78 三 藏
79 波 羅 密
80 十 二 分 教
81 八 萬 四 千
82 戒律部（但し麦紙缺）

八十二卷七十九冊である可きものが、第八、第六十九の兩卷二冊が失せて居るから八十卷分七十七冊の現存である。第八十三卷以下は百二十卷の完本であるから、三十八卷が第三帙と成つて居る筈で、智山著書目錄に其の第百五卷が缺けて居るとあるから百二十卷の中、八、六九、一〇五の三卷が缺けて居る譯である（第八卷の事、智山目錄には言及せぬが、もれたのだらう）。

本書は要するに、右の如くに梵語を大きく意義分類し、さて其れを又細分したものであり、例を天文部に取ると、天文に關した陰、陽、雲、五色雲、浮雲、金藏雲、雨、六味雨、烟、霧、風、毗藍婆風、毘濕婆風、僧伽多風……黑風などゝ云ふ語を擧げ、其れに梵字で梵語を記し諸書により用例と解釋とを擧げたもので、梵字は書かぬものもある。引用書名は略名で擧げ、且つ枠で圍んで居る。大體は註文豐富詳密にて、一語の解釋は量から云へば夥しい。だからこそ、本書が百二十卷と云ふやうな浩瀚なものとも成つて居るのである。梵語辭書には法三宮の梵漢相對鈔五十卷の如き浩瀚なものがありて、何故斯くも大部なものに成り得るかを怪しく思うた事もあつたが、用例や解釋を諸書より引用する場合には、五十卷百卷のものと成るのも極めて當然の事である事が、梵漢名句を見て理解できるのである。引用書として、經、經疏、音義が夥しい事は云ふまでも無い。梵語辭書としては飜梵語が見える。ほんの瞥見した程度だから明言はできないが、梵漢相對鈔の如きは引いて居ないやうである。本書の引用書を査べる事は大寂の涉獵の博さを知るために、又當時何う云ふ參考書があつたかを知るのに、重要な事である。他日再見の時には此の點を注意したく思ふ。內典が多くて、外典が少いのは勿論であるが、外典の中には香部には、其の性質上本草綱目の如きもある。なほ、訓註は全部漢文である。

本書の各册の表紙を檢して行くと假表紙の右上方隅に㊀と云ふ風に數字を圓形にて圍み（これは數字も圓形も朱筆だつたと思ふ）其の下に「戊寅正月廿六抄了」と云ふ風に註したもの（これは墨筆使用だつたと思ふ）がまゝある。しかして其の數字は、大學で印刷した算用數字のものとは合はない。今其れらを全部擧げると左の如くである。（算用數字は大學で施したもので、卷序を示すのである）。

二(17)顯　色　部　抄出了丑八月廿九日

三(53)諸　山　抄標了丑十月三日

四(71)天　文　丑十月三日抄了(二行に書く)

五(73)數　量　部　丑十月廿七日抄了(同右)

七(56)宮　室　總　名　丑十一月廿日抄了

八(4)樹　部　戊寅正月廿六抄了(日字脫ヵ)

九(66)衣　材　戊寅二月十八日抄了(二行)

十(15)病　部　寅二月九日抄了(同右)

十二(35)十　號　戊寅四月八日起首抄略
五月九日了

十三(43)菩薩通稱　寅五月十一日抄了(二行)

十四(46)聲聞總稱　寅五月十二日起首
六月十日抄之了

十五(20)八聖賢分部總稱　寅六月十日抄首
七月晦抄了

十六(27)諸龍別名　七月晦抄起(日字脫)
九月十四了(マヽ)

十七(52)外道名計　寅九月十二抄起(三字脫)
[illegible]月十三日抄了(マヽ)

[illegible]

[illegible]

[illegible]

廿六(65)僧　坊　分　職管屬僧尼附　文政二卯年四月十九日標目了

ところで是れが何う云ふ事を示すかと云ふ事は、一二より「十八」までのところでは全く判らず、見方によつては其の年月日に其の册の原稿を作つたかの如くにも見られるが、「廿一」「廿六」の兩册を見ると、はじめて「標目」の語が見えるので、こゝに梵漢標目と結びつけて、「抄」「了」「抄了」「抄出了」「抄標了」「抄略標目了」「標目了」と云ふのは、此の百二十卷の梵漢名句を土臺として縮約して、三十卷の梵漢標目を作り出した事を意味するのである事が判るのである。しかして其の標目を作つた年時も、丑、寅などゝあるだけでは、一寸判らないが、戊寅とあるものに至りてはじめて、大寂の經歷を檢して、其の文政元年なる事を推定し得る可能性はあるが、廿一、廿六の兩册には文政二卯年とあるので、完全に明白と成る。卽ち、此の梵漢名句に、斯う云ふ註記がある事によりて、梵漢標目を抄出する事が、丑寅卯の三年に亘り行はれて居た事が判るが、智山學匠著書目錄に據ると、梵漢標目卷第一に「沙門釋大寂集　文化亥五月十四日」とある事と結びつけると、亥(子)丑寅卯の順と成るから、標目の製作は文化十二亥年の五月より始まつて居た事が考へられる。但し其の抄出が何時終了したかは判らぬ。がとにかく是れにより、梵漢名句の成稿が、文化十二亥年五月以前であつた事――無論補訂は何時までも行はれるだらうが、一通り出來上つた時期は大體判るのである――も判る。但し此の圓形で包まれた數字が、何の順序を示すのであるか、又何故、自分の見た七十七册の中でも僅か十七册のみに、斯かる記入がありて他册には其れが無いのであるか、と云ふやうな事は全く判らぬ。註六

こゝで一往考へて見なければならないのは、梵漢名句の成立年代の事であつて、悉曇撰書目錄や、智山著書目錄には、文化己巳年より文政戊寅年までかゝりて出來たとして居るが、其は名句の第一册の奥書と、第百二十卷の表紙に

「文政戊寅四月八日抄了」とある事を根據としたのであるが、若し此の見方が正しいとすると、名句は文化六年から文政元年寅年までかゝりて成り、一方名句を抄出した標目は文化十二年五月から出來はじめて居ると云ふ事に成り、不自然である。此の種の著述を成す場合としては、普通は、名句が一往出來上つてから、其の抄出書を作るのが順序であり、一方の完成と、其の抄出書の抄出開始の時期とは、理論上、時間的相異が無ければならない筈である。しかして標目の自序を見ても、名句が一通り脱稿せぬ先きに、一方では標目を作り出したと云ふやうな樣子は、全く見えず、此の文では、名考百三十卷が出來た後に於いて、或る人の請によりて標目を作つて居るのである事は明らかである。で斯う云ふ事から考へると、名句の成稿を文政戊寅四月とするのは誤と見なければならぬと思ふ。「抄了」は、他冊の「抄了」「抄出了」「抄標了」「抄略」「標目了」と同義であると信ずる。第百二十卷（此の卷序も果して百二十卷であるか何うかは疑問である、既述の如く卷次を示す數字を著者は自記して居ないからである）の抄了が文政戊寅四月八日であつたゞけの事であり、抄出はこれが最後で無かつた事は、文政二年四月十九日の抄出があるのを見ても判る。

さて意義分類體の梵漢名句の梵語と譯語とのみを拔書し、其れを大體靡多體文順に並べて、さらに其の下位分類の標準を意義分類としたのが梵漢標目三十卷である。故に、梵漢標目は梵漢名句を縮約したものである事に間違ひは無いが、組織は異つて居るのを無視してはならぬ。標目と云ふのは名目を標出したもの〻義であらうか。さて改めて梵漢標目につを述べる。

さて、梵漢標目は、四軸五十八冊が存するのだが、うち見たところ同じ樣な亂雜な草本が二種、又は其れ以上存するかの如くに見え、極めて短時間内に於ける調査に大いに困つたのだが、其れはやはり智山學匠著書目錄の記事にあ

る通り、清草二本であつたのである。しかし清草二本と云つても同じ様な端本である事は後述の通りである。なほ種類の異る草稿も交つて居るかの如くでもある。

此の書は、摩多體文順であるから、第一巻を知るは容易である。そこで表紙に「a上」[註七]とある册を開くと、内題の次ぎに、左の如き署名と自序とがある。序文は克明ではあるが巧みならざる文字で七行に書かれて居り、句讀訓點連續符などが丁寧に施してあり、又文句はところ〳〵文字を改めても居るのだが、今は印刷の都合上其の訂正した方に從うた。連續符はこれも印刷の都合上總べて省略するが、他は全く大寂の書いたまゝで示すのである。

梵漢標目卷一　　沙門釋大寂集

余編集梵漢名考其稾始成無慮得一百三十卷或請出下刪其註釋但爲標目者余曰若無憑據人詎取信不有註釋義亦難通而固請不止遂有此作釋爲三十卷名曰梵漢標目凡出梵字有正有准准者註云准又有梵而無漢有漢而無梵者並不錄之且對註相涉字難辨別且從其一以俟後賢云

終行の俟字は、彳篇に矣を書いた字であるが、マツに相當すると覺しき文字に、斯う云ふ字形のものがあるとも思へないので改めた。さて此の序文は、智山學匠目錄にも載つて居るが、其れには署名の下に「文化亥五月十四日」と年月日を記し、且つ文字も「無慮」が「母慮」と成つて居ると云ふ相異がある。恐らくは今一種の本の第一册に見えるのを擧げたのだらうが、自分は何うしたものか其の方の序は氣づかなかつた。さて此の序によりて梵漢標目の成立由來は明らかであるが、文化亥五月十四日とあつても、其れが標目の一往完成した日で無く、標目を作り初めた年月である

事は既述の通りである。序文は何時作つたか知らぬが、標目が一往出來た後に書いたものと見るべきだらう。匡廓ありて罫の無い美濃判型の紙を使用し、一頁十行一段書き、裝釘は紙縒を使うた假綴であり、表紙は當然本文のものと同じである。本の大きさは、紙を綴ぢただけにて製本してないから大體の事しか云へないが縱七寸七八分、横五寸五分位である。さて本書の組織は、摩多體文の各字の中は意義分類體にしたものであり、此の點は色葉字類抄や節用集と同じである。第一・第二の兩册はアの部であるから、此の二册を土臺として、意義分類の模様を示すと、第一册は

眼　耳　口　身　意　色　聲　香　味　地　山　水　火　天文　時分　數量　器物　寶財　宮室　塔寺　樹木

花藥　菓實　雜草　菜蔬　百藥　衣材　裁服　疾病　雜語

の三十門(門とも部とも區つてはない)にして、第二册は

如來十號　諸佛別名　釋尊名號　佛頂　諸觀音　滅後菩薩　聲聞總稱　聲聞別名　滅後聲聞　聲聞總素

八部總稱　天子別名　天女別名　曜宿總稱　曜宿別名　執金剛　明妃　龍王　藥叉　羅刹女　鳩槃茶　鬼　神

天魔　仙人　外道　獄卒　氏族　王庶通稱　親族　聚落村邑　處所　園林　地獄總別　三藏通稱　十二分教

戒律　禪定　智慧　廿七賢聖　地位　印契　敬儀　祭祠　雜法門　典籍要語

の四十六門にて、其の第一册卷頭の「眼」の所を述べると、先づ「眼」と標目し、梵語を梵字であげ、其の左傍に一字下げて漢字音譯を示し梵字書きの下に譯語を示したものであつて、「眼」部の語彙としては、譯語で示せば、眼・目・盲・不眴・觀・顧・望の如く、要するに眼に關した語彙である。「耳」部のは聲一語、口部も口一語、身部には

身分　分　支　體　身生　亡身　形相　身　支分　具形相者　無相　垂髮　糞　骨　指　指節　胯　腸　命

生支　身生　唾口　端正　醜

の如きがある。第一冊の最後の雜語としては

不　無　非　離　未　不可　晉　正　行　分齊　有　空　不　至　所出　入　遍入　遠離　無間　謀　飛　可

復　咸皆　攝受　離　共　類　無餘　遍現　不應　過　疾行　停

其の他多數の語が記されて居る。此の分類に、蘇梵語の影響のあるのは否定できないのは、梵漢名句と同じである。稿本なるが故に、胡粉で消した上に書いたり、紙を一丁分貼り足したり一部分切りとりて更に補うた所へ書いたり、押紙を施したりしてある事も梵漢名句と同じである。

さて是れにより、アならアの中での組織が何んなものであるかは判明したであらう。すべて斯う云ふ辭書では、はじめの所が、いつも他よりは整理せられやすいものであり、本書でもこの所が最もよく整うて居ると見られるから、アを代表冊として、ア部の一斑を以て三十卷の全貌を推しても可い筈である。部門數が、全卷ではこれより多かる可き事は云ふまでも無い。要するに斯う云ふ組織であるから、單に意義分類のみの梵漢名句とは組織はかなり異るのである。本書が梵漢名句から作り上げられた時代は、梵漢名句の條で述べたやうに、早くとも文政二年四月十九日以後の事だらうと思はれる。序文の所に文化十二年五月の日附があるからとて、漫然其の時の成稿とするは誤である。其の時に抄出を開始したと見る可きである。書名の事は梵名句のところで言及して置いた。

本書は序文に三十卷とあり、又或る一冊（第三帙の中）の表紙にも「共三十卷」とあるが、現在は第一帙十二冊、第二帙十

三冊、第三帙十七冊、第四帙十六冊の四帙五十八冊が存し（尤も斯くの如く帙を配列するのは自分の便宜上からであり、帙其のものには何ら書いてあるわけでは無い、何故斯く分類したかは後に説く）、一寸見たところでは、同じ冊があるものが多くて、（殆んど全部が其れ、中には同冊が三部存するものもある）又一冊であるものが紙縒の綴糸がきれて二冊と成つて居るもの、又其の反對のものもあるやうにて、かなり亂雜にて、卷序のまゝに配列するのにすら困るのだが、是れは、其の筈にて實は、二種の草本が共に保存せられて居るからである。其の二種と云ふ事は、見て居て氣づいたが、智山學匠著書目錄にも然ら書いてある。但し二種と云つても、其の中になほも重複した冊が少し乍ら存する。即ち其の四帙の内容は左の如きものである。假裝の各表紙には、其の冊に收める語彙の語頭字を記して居るから、其の語頭字を記して見る。但し内容を一々檢したのでは無い。

○第一帙　十二冊存（なほ他に十一、十四の二冊ありし筈）

1 a ā aṁ aḥ　2 同上　3 i ī　4 u ū
5 ē ai ō au ṛi ṛī ḷi ḷī　6 ka 上　7 ka 下（但し表紙無し、第三帙に比較すると ka の下に當る）
8 kha ga gha ṅga　9 ca cha ja jha ña　10 ṭa ṭha ḍa ḍha ṇa　11（缺）
12 tha da　13 dha　14（缺）

○第二帙　十三冊存（なほ三冊ありし筈）

15 pa 上　16 pa 下　17 pha bha　18 ba va 上
19 ba va 中　20 ba va 下　21（缺）　22 ma 上
23 ma 下　24 ya ra la　25 śa　26 ṣa

27 sa　28 ha　29（缺）　30（缺）

（右の中18は十七、19は十八、20は十九、17は二十といふ風にて矢筆にて改めて居る。改めたのが何人であるかも判らぬが改める理由は多少は首肯できる、恐らくは著者の業であらう、25は自分の抄記ではkhaと成つて居るが、斯う云ふ所にkhaが來る可きで無く、śaであるのは明らかだから、今は訂正する。khaとśaとは字形が似て居るからの混同だが、自分の誤記であるか、著者の誤記であるかは、今は確められない。）註八

右二帙を甲稿と名づけたい。其の譯は此の二帙所收のものだけは、各冊の背部に、卽ち洋裝本でも和裝本でも書名を記すところに、「共冊」とあるからである（他の二帙のものには然う云ふ事は無い）。さて甲稿の中では、taに當る第十一冊、naに當る第十四冊と內容不明の21 29 30の兩冊が失せて居り、三十卷の中、二十五卷、二十五冊が存するのである。

次ぎに第三帙、第四帙は乙稿と名づけようとするものだが、其の內容は

○第三帙十七冊存

1 a ā aṁ aḥ 上　2 a ā aṁ aḥ 下　1 a ā aṁ aḥ 上　2（缺）
3 i ī　4 u ū　5 ē ai ō au ṛ ṛī ḷ ḷī　6 ka 上
7 ka 下　8 kha ga gha nga　9 ca cha ja jha ña　10 ṭa ṭha ḍa ḍha ṇa
11（缺）　12（缺）　13 dha　1 a 上
2 a 下

6 版心の所に「梵漢標目六」とあるもの、表紙無く巻部にて丁附あり八十四丁より始まる

第何冊か不詳のもの二冊（表紙も版心の所の記入も無く、何字を語頭とするかは記す事を失念した）

○第四帙　十五冊存（實は十六冊であるべきもの）

14 na　15 pa 上　16 pa 下　17 pha bha

18 ba va 上　19 ba va 下（これは第廿八冊と合綴）　20 ma 下　21（缺）

22 ra la　23 ya　23 śa　24 ṣa ha

25 sa 上　26 sa 下　27 金剛界卅七尊理趣經十七尊會

28 三藏別目（第十九冊小乘廿部と合綴）

「梵文未詳」とある冊

（右の中17は朱で二十、18は十七、20は二十二、22は廿四、24は廿八、25は廿六、26は廿七、27は廿八と其れ其れ朱で改めてある。廿三ya、廿三śaはこれはもとのまゝ。此の第三帙中の二冊だけに「大寂之印」と云ふ方形陰刻朱印が表紙に存する。）

と云ふのであり、二十八卷までについて云へば、a ā aṁ aḥ下の2、taに當る11、thaに當る12、內容不明の21とが缺けて居るが、一方では、同じa ā aṁ aḥの部上下二冊が三種（中で一冊缺）も存し、又kaの部にも重復があるのである。（6のカが二冊あるのは、或いは綴が切れて一冊が二冊に成つたのでは無いかと、昭和十五年十月の今想像するが何らであらうか）これで見ると、第三帙所收の冊の或るものには、二種三種の稿本も存したかの如くであり此の帙は亂雜である。とにかく、右の如くで四帙五十八冊現存のものを、一部三十卷の書として纏めると、四帙で相補ひ合うて、taに當る第十一冊、內容不詳の第二十一冊とが無く、それに第二十九、卅の二卷が缺けて居る譯であるが、第二十八冊までで體文のśa ṣa sa haを濟まして居るのから察すると、其の第二十九、三十

の兩卷は摩多體文の分類とは關係無き附錄的なものであつたやうに考へられる。ところが、第四帙には「梵文未詳」とある冊や「金剛界卅七尊理趣經十七尊會」とある冊、「三藏別目小乘廿部」とある冊などが存するのである。して見ると、梵漢標目三十卷の末の方の二冊程は此の種のものの卷であつたものと想像せられる。次ぎに第二十一冊であるが、これは兩種の稿本ともに缺けて居るから此の卷の內容は全く見當がつかない。一體此の21の前後は甲稿によると「ba va」の部が上中下三卷三冊と成り、其れに、ma部の上下二卷二冊が續く其のba vaとmaとの中間であつて、介在すべき卷として考慮に上るものが全く無いからである。とにかく、21は不明として、三十卷本でtaの11、其の他21 29 30の四卷四冊が闕けて居るものと推定せられる。

然らば其の甲稿と乙稿との先後は如何と云ふに、一方が他に比べて內容が整頓して居り、淸書本的面影があると云ふのでは無いやうにて、稿本としての亂雜程度は全く同じであり、兩本本文の整理狀態により前稿後稿の別を立てるは——或いは精細に査べたら、內容より見て、其の區別を發見できるのかも知れないが、忽卒の間に査べた自分にとりては——不可能であつたが、昭和十五年の今思へば、乙稿の方は同じ部の稿本が二種存するものもあり、冊序が亂雜であるが、甲稿は其れに比べると纏つて居り、各冊の背部に「共卅」と記しあるなど、とにかく乙稿よりは整理せられた形態であるらしく思はれるから、此の甲稿の方が、所謂淸書本であつたのだらうと考へるやうに成つた。しかし、本文が淸草二本の辨別が容易である程の相異を有するものでは無いのである。しかして自分が梵漢標目の代表的部分として取上げたのは第三帙のa部上下二冊にして乙稿に屬するものであり、自序は此の上冊に存するのみで他冊には無かつた事を、昭和十年筆の解說には記して居るのに、智山著書目錄に據ると、も一つ序があつた事に成るので自分の

粗漏を悔しく思ふと同時に、不思議にも思うて居るのである。

本書の順が摩多體文順である事は、前記の目錄で判るが、同時に又末の方が、pa pha ba bha ma ya ra la va の順と成らずに、

pa　pha　bha　ba　va　ma　ya　ra　la

と成り居り便宜的である事も判るだらう。これはbaとvaとを便宜上一緒としたからであつて、是れは先づ認め得る事である。第四軼ではra la・yaの順である。これは何うやら誤りのやうだ。

自分はこゝまで梵漢名句や梵漢標目の解說を試みて來たが、考へて見ると、僅かな時間に忽卒にして査べたのであり、或る册はやゝ丁寧に見たけれど、他は全く內容を見ないものもありて、從うて解說として不充分なものと成つた事を斷つておく。

著者大寂について、悉曇撰書目錄に

大寂梵學の系統不明なり。久しく智山に留學し、天明二年その師英祥の示寂に依り、武州高西龍華院に歸り、三十八年關戸を閉ち、法用を廢し、述作に從事せりと謂ふ。その本寺は今尙施餓鬼をも行はざる慣例あり。その著文殊靈驗記は寶政十一年十月刊行せられ、板木今尙末寺雨寶寺に存す。

と見える。自分が其の龍花院の代理者たる蕨村金蓮院の住職齋藤行尊師に照會したところによると、大寂は名は俊元、武藏國南多摩郡日野町川邊堀ノ內村（八王子市東一里）の內山氏の子として寬保三年に出生し、北埼玉郡高柳村字正能の眞言宗新義眞言智山派の龍花院第二十四世の英祥（天明三癸卯年正月廿九日寂世壽不詳）の資と成つたが、資性溫良敎學、京の智山に留學

する事二十有三年、師英祥の病により歸國し二十五世を繼ぎ、文政四辛巳年七月廿七日に世壽七十九歲を以て示寂したと云ふ。（齋藤師は寛保二年の出生とせられたが、世壽から逆算すると一年齟齬が合はぬので自分は同三年の出生としたのである）大寂歸國の年を天明二年とすると、寶曆九年か十年頃、卽ち大寂十七八歲の頃より京に上り、四十歲頃まで勉强して居たものゝ如くである。（英祥歿年は天明三年が正しからう）

一五

採揀枳橘鈔　寫、六卷　行智　文化十二年二月十二日成

慧晃の枳橘易土集を採揀したから此の名があるので、其の事は行智の「採揀例言」の末に明記してある。採揀はトリエラブである。密教大辭典が、枳橘易土集の「原名」を採揀枳橘集と云ふと記し、佛書解說大辭典が、「採揀易土集」をば、枳橘易土集の別名として居るのは、何れも誤である。二十六卷のものを六卷に整理縮約したからこそ採揀と云ふのである。なほ梵學史概觀に「採摘枳橘集一卷」とあるのも、行智の例言より見れば誤だらう、卷數も間違である。枳橘集は既述の如くに極めて便宜的分類であり、語頭音の梵音をかなり無視したものであつたから、是れに不滿を感ずるものがあつても當然である。そして幕末の獨創的な悉曇學者行智は、本書の非學術的である點を訂正した。卽ち枳橘鈔では、イウエオには正しくi u e ōを頭音とする語を收め、サ行はca cha ja jha śa ṣa sa を分ち、タ行はṭa ḍa ḍha ta tha da dhaを分つと云ふ風で、忠實に摩多體文の順に從うて居る。其の採揀の方針は卷首の詳しい例言（一頁十行四丁分）に見える、其の第一條に

本書（○易土集）梵語ノ集成セル、古來マダ此書ノ如キ廣博ナル者アラズ、故ニ梵語ヲ索尋スルノ一事ニ於テハ、實ニ此書無ンバ有ベ

カラズ、撰主ノ勳(〇勳の誤か)勞尤モ至レリト云ベシ、然レドモ只惜ムラクハ、其纂集ノ次第、此方ニ所謂五十字母連音ノ序ニ依テ部ヲ分チ、且其輯錄スル所ノ如キモ、啻ニ本邦習音ノ訛唱ヲ以テ集收セシ故ニ、字母ノ次第ヲ以テ梵文ニ對スルニ、當ラザル者多シ、所謂迦ハka、伽ハga、亦賀訶ハha字ナルヲ、共ニ混ジテka ノ部ニ列シ、或ハ迦佉ノ字ヲ此方ニ所謂漢音ニ呼テ、キヤ音ト爲テki部ニ入レ、車者モサ音ナルヲシヤト呼テ、ci部ニ收メ、或ハ轉ハva字ノ對ニテ音ヲ、梅はmeニ對シテ音メナルヲ共ニ濫シテba部ニ入ルヽガ如キ、此汎濫雜殆ンド拯カラズ、予繕寫ノ次ニ、因テマヅ此ヲ改正シ、其對註、其梵文ニ復歸セン事ヲ要ス、然レドモ猶悉ク盡ス事能ハザル者ハ、次々云フ所ノ如キ仔細アルガ故ナリ。

と云ひ次條に

梵語漢譯對ノ字音、古今ト地方ト人トニ依テ、呼法ニ正訛アリ、異同アリテ一定ナリ難キアリ、梵音ニ在テハ、モトヨリ如レ此古今方土ノ異音有ベキニ非ト云ヘドモ、漢字音ニ至テハ古今ト時處トヲ殊ニスレバ、必ズ字音モ亦遷フ事アリ、或ハ翻譯ノ新舊、諸地ノ三藏、筆授諸賢ノ各自、耳吻ニ轉訛シテ、自然對註ノ異途無キ事能ハズ、タトヘバ縛ノ字ヲba va 二字ニ通用シ、或ハ ga gha ja jha da dha ba bha 等ノ濁音ノ字互ニ混用シテ分タズ、或ハ u e ノ二韻互ニ相濫リ、ie 二等ハ韻モ亦相涉リテ分聴シ難キ類、今ニシテハ殆辨別スベカラザル者アリテ、糺正ヲ爲シ難シ、因テ此類ヲバ暫ク相近キ方ニ收メ、或ハ各部ヲシテ案ジテ强ニ改置セザリシモアレドモ、其顯著ナルヲバ、悉ク梵文ノ次第ニ因テ正シ收スル者ナリ(〇誤字三ケ處あり、今訂正して引いた)。

と云ひ(梵音は時處により變りなしとは如何)梵文を分類するのは、一律にはうまくやりかねる由を述べて居るが、梵音をよく心得て居るものに成れば成る程、分類に困難を感ずるのは當然である。凡例の最後は本書の成立事情を記して居る。其れに據ると行智の友人に平野元貞と云ふ者があり、筆蹟の上で倩美をも好み讀む人であつたが、文化十一年秋冬の頃、枳橘集を例の藏書家屋代弘賢に借り書寫せしめた。そこで行智は其の寫本を借りて自ら錄し、其の際梵語の本音に從うて分類を改めて採擇鈔と名付けた、其の業を文化十二年二月十二日の夜卒へたと云ふのである。各語の註は易土集で

は詳しいが、行智のでは漢譯語と引用書とを示す程度である。第一卷上冊は目錄、例言、慧晃舊序、舊凡例、引書目錄より成る。署名は

本集　京兆雙丘沙門慧晃集

擇訂　東武淺草隱士行智鈔

とある。自分の見る京大研究室本は「弘化四年丁未冬十月、加梵文朱書畢、行阿」とある半紙本だが、行阿は行智の門人である。但し此の本、誤寫の多い事は、例言だけについてゞも云ひ得る。其の行阿本は枳橘鈔六卷十二冊の他に、易土集附卷の四卷四冊（これには行智の手は加へられて居ない）及び明覺の悉曇要訣の一部分一冊とが添うて居る。

一六

梵漢對譯字類編　一　行智　天保五年三月綜論　同　六年正月刊

刊本だから珍しく無い書だが、佛書解說大辭典には擧げない。細長い縱の小冊子である。一頁七行、僅か二十八丁。扉に「天保甲午新鐫」とはあるが、實際の刊記は「天保六年乙未正月發行」である。卷頭の「梵漢對譯字類編綜論」（九行、十二丁）の日附は「天保五年甲午三月」であり、漢文他序も天保五年端午のものである。本書は普通の梵漢對譯辭書では無く、梵語の某と云ふ音を漢字音で音譯する場合に、如何なる漢字を使用して居るかを示したもので、例へば母韻イの短呼には伊・縊・益・壹・億の五字を當てゝ居ると云ふ風な事を示したもので、排列は摩多體文の順である。便利なものと云へば便利重寶であり、一部學者からは重く評價せられて居るやうだが、此の種のものを行智程の人が作るならば、

同じ事ならば、もつと學術的に某と云ふ譯經者は、悉曇の某字に某と云ふ漢字を當てゝ居る、某の場合では斯く〳〵である、又某經の音譯では、某と云ふ漢字が悉曇の某の音を示して居ると云ふ風に、譯經者と、譯經と、譯經年代とを區別した樣なものが欲しいと希望するわれ〳〵には、先づ無いよりはましであると云ふ程度のものであると云ふ可きであらうか。卷首には「綜論」があり、梵漢音譯に妥當ならざるものゝある事、漢字音は時代により變化し、現代の唐音は古代の音と等しくない。故に對譯當時の字音をよく査べなければ正しい梵音は得られないと云つて居るが、正しい見解である。又日本には朝鮮と同じく、古い支那音を傳へて居ると見て居る事も、正しい說であるが、早・相・香・賢・牽・信・因・讃・丹について、漢吳音以外の音として、其れ〳〵サガ・サグ、カヾ・カグ、ケニ・ケヌ、シナ、イナ、サナ・サヌ、タニと云ふ音が存したのだ、然う發音して居たのだとして居るのは誤解であると思ふ。だが字音研究史上、此の綜論の說は簡單だが注意するに足る。本文の署名には「江戸悉曇沙門行智集」とあるが、行智は斯く名乘る程に獨學で悉曇研究に努力し、悉曇字記眞釋八卷を書いた人である。淺草福井町の銀杏八幡の別當覺畔院の住持で、所謂修驗者卽ち山伏であつた。天保十二年辛丑三月十三日に歿した。鈴木朗や平田篤胤とも交友關係のある人である。

一七

梵語聲類　寫、三冊附錄的なものと共に　岡本保孝

保孝の況齋著述年譜を見ると、文政五年二十六歲條に前漢郡縣聲類、六年條に晉志郡縣聲類、七年條に李唐郡縣聲

類、嘉永六年五十七歳條に現存經籍姓氏聲類、安政二年五十九歳條に起頭聲類、同三年條に群籍聲類、慶應二年七十歳條に和名抄聲類の名が見え、又、日本文學者年表續篇にも物產聲類、梵語聲類、髓腦聲類の名が記されて居る。そして其の髓腦聲類と云ふのは、雜和集・和歌色葉集・俊頼口傳・奥義抄・袖中抄・などの歌書や齋藤彦麿旁廂の項目の五十音索引であるから、此の岩崎文庫和漢書目錄（昭和九年十二月刊）に「梵語聲類　岡本保孝　寫本　三卷　三冊」とあるもの も、恐らくは梵語關係の書の索引であらうと想像して居たところ、實物を見せて頂くと（昭和十年七月二十四日拜見）案の定、想像通りのものであつた。索引類は辭書に非ずとする論を首肯し得ない自分は、梵語聲類が、梵語の索引にして珍しいものであるが故に、愈々日本梵語辭書史から本書を除外する勇氣は無いのである。さて本書は、日本文學者年表續篇には二卷とあるが、判紙型三冊本にして、水色の表紙に題箋が存し「梵語聲類　佛（法・僧）」と記してあるのみであり、内題や序跋署名は全く存せないものだから、他日題箋が蟲で損はれたり、又糊氣が無くなりて失せたりすると、書名は完全に不明と成つてしまふ恐れがある。諸書に見えて居る漢字音譯の梵語を五十音順に配列し、其の一々に、其の梵語の見えて居る出典の書名・卷・丁數を略記したものにして、例へば、語彙としては

阿羅訶、阿尋多羅、阿彌陀、阿閦、阿那含、阿羅漢、阿離野、阿那婆……

と云ふ風に擧げ、其の出典を示すのは

阿羅訶　第一〇琳九左二十六右　十九廿七右　七〇續四右　八〇論二右　廿

阿尋多羅　第一〇要中廿六右　〇論二右　廿三　〇維摩一右　廿三　〇

の如くである。一頁十行、美寫、後より塡補して行けるやうに、ア・イ・ウ等の各部の尾には餘白が充分殘してある。

佛册はアよりトまで、法册はナよりヲまでゝあるが、ア部とかイ部とか云ふ標出も無いのである。索引の本文は佛・法二册であり、僧册は附錄的なものだが、殆んど全部が空白紙にて、しかも未整理だから、此の册の解說を加へるのは不可能である。或ひは保考の自筆稿本であるかも知れない。

さて本書、今云つたやうに、内題・序・跋・署名等は全く無いのだが、佛册の卷頭には、翻譯名義集、繹氏要覽、一切經音義(慧琳)、大智度論、續一切經音義(希麟)、法苑珠林、涅槃經疏(隋灌頂法師)、維摩經注十卷(後秦僧肇)の八書の名を擧げて、其の性質を略註して居る。例へば翻譯名義集については

本文寛永五年刊又寛文六年刊予藏寛永本、此原本蓋據明藏本而換面目者

と云つて居る。右の書名のある丁の次丁表より、四頁分の片假名文凡例と成り、名義集は第幾と記す、「續補」は翻譯名義集卷末の補遺の事、「要」は繹氏要覽の事、「集解」は從義四教儀集解の事、「琳」は慧琳音義の事、「論」は大智度論の事、「千」は梵語千字文の事、「續」は希麟の續一切經音義の事、「玄」は玄應一切經音義の事、「新」は一如の法華新注の事、「弘」は止觀の輔行弘決の事であると、引用書名の說明をして居る。又「誤テ梵語ニアラザルモノヲ載タルアリ、淨寫ノトキ除クベシ便宜ニヨリテコトサラニ載タルモアリ、ソハ附錄ニスベキカ、名義集ナドモ梵語ナラヌモ載セタリ、第四十八ニ安居ヲ載セタル類コレナリ」などゝもある。凡例が終ると次丁には、近代著述目錄により、梵語學者眞隆の梵語關係の書名八部を擧げ、又「天明ノ頃慈雲ト云僧アリ、梵學津梁千卷ヲ著シタリ。イマダ草稿ニテアリト、智禁師イヘリ……」などゝも記して居る。

要するに本書は梵語索引に過ぎないとは云へ、淺石に、結木も山の際の式に發錄するは必要であらう。分量は佛・法・僧三册にて、[illegible]である。[illegible]

一八

○梵本對註　寫、一冊　判紙型よりは大　著者時代不詳

梵語を梵字で色葉順に擧げ、其の發音を片假名で旁註し、下に漢字義譯を記す。譯語の無いものもある。梵語の色葉分なるが故に無論例により分類は便宜的である。イよりスまである。序・跋・署名などは無い。一頁八行の罫紙（判紙より大形）に二段に書いてある。本文五十八丁。空白多くして稿本と見られ、要するに貧弱にして取りたてゝ云ふ程のものは無い。さて本書は內題は「梵本對註」であるが、表紙には「梵語對註　上」（但し古し）と云ふ題箋がありて、次ぎに說くところの「漢字之梵語對註　中（下）」の二冊と共に三冊一具に取り扱はれて居るが、これは本書本來の姿では無い。本書は一冊で獨立のものである。次ぎの漢字之梵語對註と共に東京帝國大學梵文學研究室所藏である。次ぎの書と共に高楠博士も擧げられず、無論佛書解說大辭典にも見えない。

一九

○漢字之梵語對註　寫、中・下の零本二冊　著者時代不詳

漢字音譯の梵語を色葉順に擧げて漢字義譯を註記して居る。內題は「漢字之梵語對註中卷」、前の「梵本對註」の用紙と同じ罫紙にて（本の大きさ縱七寸八分五厘、橫五寸六分五厘ほど）二段書きだが、譯語註が長文である時には段拔である。例により空白が多い、稿本であらう。見より左までのものと、幾より寸までのものとの零本二冊だから、題箋は「漢字之梵語對註　中（下）」

とあるのだが、其の上卷に當る册が失はれたので獨立の「梵本對註」全一册と一所にして、梵本對註の方を「上」册としたものと見える（上の一字だけは別筆である）。題箋や本文の文字などが三册同筆であつたか、三册とも同じ大きさであつたか何うかは忘れたが、三册とも同じ罫紙を使用し、空白が多く、いかにも稿本らしい姿であるから、同じ人が作つた稿本であると見るが至當であらう。「漢字之梵語對註　中（上）」は零本だから序は無論無く、署名も跋文も無いから、著者も時代も判らない。だが無論是れも取り立てゝ云ふ價値があるとは思はれぬものであり、斯う云ふものもあると云ふだけで擧げるのである。此の類のものは、平凡な音義同樣に其の數は少くはなからうと推量せられる。

二〇

梵語伊呂波和計　寫、一册　著者時代不詳

梵語を梵字で擧げ、下に漢語譯を記して居る。漢字音譯で擧げて其れに梵字を添へたものもまれにある。書名の通りに色葉分にて、一頁十三行二段書き、縱七寸九分橫五寸六分の大きさ。一册としてはかなりの分量はあるが、空白のところも多い。稿本であると信ぜられる。漢文の序文が一丁分あるが、書物の性質に觸れたもので無いから引くに及ばぬ。序はあり乍らも、其の序には年月日も署名も無い。扉に當るところは、元の假綴時代の表紙であつたかと想像せられるものだが其の右下方の隅に「悉曇沙門高憧」とあり、憧字の下に語文五類聚最後の梵字maが書いてある。何う云ふ意味か知らぬが高憧の梵名の頭字と云ふやうなものであるかも知れぬ。高憧が何う云ふ人であつたかも未だ查へない　とされた書も亦、斯う云ふものもあると登錄すれば可い程度のものであると記ある。東大梵文學研究室蔵

梵名檢據　寫、一卷　著者不詳

日本梵學史概觀（悉曇藏目錄には記さず、佛書解說大辭典には錄する）や慈雲鑽仰會講演に見えるもの、大辭典は二冊とし東大哲學研究室の所藏と記し、書名はボンミヤウケンコと訓んで居る。自分は見て居ない。

以上、平凡に、但し微力の及ぶ限り忠實に日本梵語辭書史を概說したのである。さかしらめいた結語は無要と信ずるので、省略する。（昭和十年十二月二十三日稿、十五年十月十一日補訂）

註一、梵漢名句の事、智山專門學校へ照會して、長澤實導氏の示教を得たので補記する。實は百二十三卷なれば、大疫は大數を取りて百三十卷と書きしならんと。帙は東大にて作る。註二、「名句」とあるもの最も多く、「名考」「譯語」「雜語」等もある。註三、奥では無くて表紙である。註四、「佛部諸尊」の誤記であつた。註五、「外道名計」で可い。註六、長澤氏は46 52 53 56 60 65 66 71 73 78の十册にのみ記しあると教へられたが、これでは私の抄出よりも少い、見落されたのだらう。註七、自分の見たのは草本の方であつた。註八、やはりKaであるが、Khaに誤るやうな字體で書いてあるのだつた。

昭和十六年六月一日印刷
昭和十六年六月十日發行

立命館大學法文學部
文學科創設
記念論文集

(特)
上製定價金四圓也

編輯者　代表者　高瀨武矢郎

發行者　京都市上京區寺町廣小路東
立命館出版部
竹上孝太郎

印刷者　京都市下京區北小路新町西
須磨勘兵衛

內村外田出版印製
株式會社
刷印製本所

發行所　京都市上京區寺町廣小路
振替大阪二六九四四番
東京市京橋區銀座西二ノ一
振替東京七五三六番
立命館出版部